12
881
35

若菜上

巻の名 哥と詞とをもて号せらる 源氏乃四十賀とて玉鬘乃
君若菜ひくゝまゐられと乗せらるゝ時
わかばさす野辺に小松をひきつれてもとの岩根をいのるけふ哉
源乃返哥あり 小松原末のよはひにひかれてや野辺
の若菜も年をつむべきとある哥と又詞あるにくま
あるよし此書にあまた 源卅九歳乃冬より四十一歳の春まで也 此
事これ為又巻ありて上下とさだむる事此書をはじめ也さる
ほど上下巻を卅一巻とさだめて上下共に卅五に用之稲
本巻を卅一にたつるも不審也 但漢書一にも高紀上又高紀
下 後漢書列傳第二十上下先例あるにや 河海
抄略之 此の物語を上下とわけて御覧あるに此巻をたるも
あり 抑若菜上を卅四ともして下を卅一ともして 旧本

とせ一ふたてあるハ漢書にある紀伝をせ一つして下
紀せ二とかハ昌若紀をせ二とそえたる今乃例りなる
なり曲礼上下ハ礼記の内ゆへに一巻の中に上下あ
る也檀弓上下ハ後人乃注を施るにつきて簡策繁多なる
がゆへに二巻にわかちて上下とそえたり河海の旧紀おや
ますまする也わかれし乃巻をわかちたるかわりあらハ
とある也ふるきまハ上下とかハわかつへ下かまる安
三宮朱雀院乃五十の賀乃わかれなしを給ふへきよ
しかれともかしこく遂となる事乃上の病悩によりてのびのびなり
急ちのくて事のかり此賀の儀式もそろひあるをもって上下の巻を
にわかちしく絹ありひたすらにわかつとみゆるよしにて巻の
ありとせるなし此書にハ源氏三十九才より四十一歳迄巻をも
三ヶ年のことなるをもつつとかへし 并 巻名源四十の賀をもて題号

乃しるしとられ宗りしようる也此巻の始ハ源氏三十九乃冬
女三宮裳着のことありて四十の年賀の事ある御かたの中ニ玉鬘
姫乃事四十一歳乃春三月十日給りに明石中宮法産あり
さられる 細 此上巻を題号源氏へ給られし事をきを給
ることありて下巻をみて朱雀院の五十の賀をわかれなる
せ給へるさまよしあらく巻の名をせしと上下にわかつ
ることハ異説の書籍ありて何ゆへともあり丈抄にみえたり
来上下に分ちたる書もありて又後に注釈あまたあまりて
上下まちまちなるもある也我朝にもこれら日本紀神代
上下物語みえしうつかて上下にわかてるを河海に後漢書廿
巻此例ありとかいふもかしく事しもなくおほしまへや
此書にハ源三十九歳の冬より四十まえとなり 女三宮に事をたにおもあり
四十歳年の事ノ 并 明石中宮懐姙のことにして四十一歳三月

此巻の中は院乃御年三ヶ年成るにある也
朱雀院の御かとと有し御世は此のちえ乃法かひとりとまじへ給ふ
あやしくこゝろせし給　案　前の巻のすゑに六条院へ行幸神無月
乃ころ冷泉院并朱雀院御幸なりしをいふ
またそのころよりあつしくおはしましけるに仏ごとひ病になやみ給
しめしまして　案　是ハ朱雀院御病（上ニヤ）ちなみて出家し給はん也
とし頃おぼしめしけるひ乃御心ハあるを　案　其うへ出家のほいの御心ち也
后乃宮ハ御かくれありてのちいまはとおぼしめしけるにや御心もとなくさをも給
てもまたなれのかたこそおぼすと　案　悪后（アレキサキ）乃事也
大后逝去（セイキヨ）ハ御ここちよくきこしめして朱雀院ちうく
乃御心ゆへあり大后御在世（ザイセ）のあひだは御とんせいの心ち延
引有しと也　弄　朱雀院の法躰　細　こきでんの大后なり
此母后崩御（ホウギヨ）乃のち乃御ところにとりこもりて出家ましま也

孝経（カウキヤウ）ふかく乃給也
あなたそなたにつけてはかなき御やまひをやもかくひとつのしく
心ちなんさるべきの給ひをそて侍るへきをおもひまかせ
さしも給ふ　案　かくのごとくなるはのこゑあるべきしんさんの御て
ろさまよりあつかひもてなしやとさればせをのかれ給ふさんの御
用意ことも　細　御出家（シユツケ）乃事也
御さちなる　細　朱雀院の御はなるちも
春宮をとなくさなりて　弄　今上は御子也冷泉院の
御代あり
女宮たちあまた御座おはしましけり　花　女一宮落葉の宮女
三の宮女四宮これ也とそ
其中に藤壺の女御のしかたは帝の源氏なるくそおはしまし
ける　案　是ハ女三宮の御事成るや薄雲（ウスクモ）女院はらからの

文武天皇の子孫たるによりて一枝也　花 延喜の御時承香殿の
女御正三位源和子は光孝天皇の姫也此女御は此御かと
の慶子韶子斉子内親王三人ありし此女三宮は光孝に
あたらせ給ふにや　并 藤壺女御式部卿の宮の女ちかく
ひ也文徳天皇の御腹也朱雀院御代のみかと立后なくおはしまされ
しや

まさ坊と申しき時より給ひしく　案 朱雀院のつまさ
坊すて給ひしを御時よりも申され給ひ人とも申されし
后なとも立給はん人ならむとおほしつるにきさき御かたちもなく文母
まても后なくてもなく文徳ゆゑやそれよりしつくひとも
ゆるさせ給とや
たゝきさきのたゝしからむもとよりの給へるにとりてはなる
らうともかきひなくまてもそれなくもなく御ちもなくおほされ

きさらきはちかくみはの給ふれは清まりしみの月にもなり
さまなく　并 細 立后ともある
子か紀位 并 后乃子をとゞこそ
あし人なれとも后ともなう紀とも也給ひし母朱雀院の御代
母も立后なりし其後は内侍のうちそて立后有へきさ人なる
そもと源とも氏とも給ゆへにたく宮のひめなく立后なき紀
やその外もまたるへきさ人々も来り給は給ゆへ也
おほえさせ給の内侍のうちとも来てもまた給へ御かたへのまいる
人なくまてあるし宮のひめとせし給ひしをとゝまて
案
藤月院の内侍のうちとも悪后の母をりとも其人の朱雀院
へ来り給ゆへにやよく女三宮此母藤壺はとゝめられ給とも也
御つとも女三宮の母なれとも其とおほしくてひ給へとてとゝく
し給ひにしくとも御ひめきも給へは給く世中をも振給
ひく藤壺はいさも給とも也

みとも法師のちかうありやとおもしきさまのあそひさいせうを給ふらしく

新 朱雀院法皇ちかく御幸ありて法師あそひ給ふし

へあらうかにかの月夜よりこのつくまをさされ給ひしやうに

おりゐさせ給ひしかば人ひとすくなにおはしまして世中をうらみ

させるやうにありてうち給ひしその法師らは此女三宮とはまうさぬ

法中にまくまてゐてかくしてまつり給ひしつき宮のおはしけるに此

御法として十三日あらるとにおりゐの後にはとそむきさせまして山こもり

つらしきみん後のよふたちらとまうりてさされとかのむかしをあはく

ものし給ひんやともかく生きとたへこれ法ととうしろめたく

しあけく　おりゐさせ給ひしかへ　花 朱雀院の脱屣（ダツリ）は三濘（ミヲ）

漂中（ツクシン）であり

西山なる法寺はくるしかてあさうるまを給ふん後との法はつれつれ

とせさせ給ひしそへく　案 今此仁和寺なるや仁和年中に

光孝（クワウカウ）天皇御建立（コンリウ）也さるまたに法しくて此物語よりきこゆる也西

来貞一の法子朱雀院より此御寺を法しくたるや云朱

雀院いんさんし給ふに法しくるや法しくるともそくしや八古

のるつに法しくるゆへに高代（タウタイ）たて給ひぬるやうにあるへし

さるものや　河 李部（リホウ）王記（ワウキ）云天暦（リヤク）三年四月十五日太上天

皇遷（セン）御（キヨ）仁和寺院（サイシ）東子（カウシ）内親王不予（フヨリヤウ）也去三月十日法出

家云々　花 新国史（シンコクシ）云仁和四年八月十七日始新造（テンサウ）西山御

願（クワン）寺（シ）於先帝（センテイ）周忌（シウキ）法会（サイニチ）云々業西山なる法寺とへ仁和

あるもいふ也光孝天皇の法願寺として仁和年中に法て

らまうしたまふく仁和寺とへ号せりされはちかの光孝天皇

の一周の法会をも修（カン）寺ありてたてまつるる文字多天皇法

出家れのち延喜元年十二月に御室（台）を仁和寺にたててうる

同四年円（エン）堂（ダウ）をはくらる供養（クヤウ）ありけるにへ金剛界（コンカウカイ）会（ヱ）三（サン）

摩竟ゝとハ又承平ハ天暦六年三月に法出家ありて
四月に仁和寺に遷御ありし此物語の朱雀院ハ承平此みか
どにあたりて人々やうやうとりまとひ又これにまして見合て出
家あるやうに 私 朱雀院の山寺乃事准仁和寺に天暦六年
村上天皇仁和寺にミゆきありしてあたりをなハせ給ひしなり
こと 細 仁和寺也一本にはこゝろありてこゝめとあり
又これ宮乃法事ときおほしめしいそかせ給ふ院の内にも大ひん
ちとせのおほんきさ法てかしこまりけるともなく参るを
いかさまにれきあれかひきのまへてもこそしゆくへあやうきなりとも
案 女三宮此裳着乃事也
さて此法ハいとよくしなましく世給ふそのつきにくととちん
おとみさゝちあそ 案 女三宮へとりまし給へる調度なとを
案しせらるゝなりや

おほんそうめんともあまたある春宮ハ御はなやかにそへて
せまそろむかへを給ハんを法ひんとはかりにひとめんとこゝろを給ふく
案 女三宮へ参りてかゝりける物ともをなとはかりてちかき
うち案せ給ひとや 私 宮よりつきも法出家の後朱雀
院とや給ふ承平四年に朱雀院法皇御ふの事ありとまり
御(ホウワウ)乃記にあるとなり
わたらせ給へりなく女法ともをそひひとりのかきも給ひく案かり給へ
り 案 春宮(トウクウ)朱雀院へ法おはするや母女御もまこゝろならひく
案り給や此女御ハ承香(セウキヤウ)殿とや髭黒(ヒゲクロ)の大将のいもうとなり
春宮とハ今上乃御事なるへし
すくれたる法おほえもあらしもおはしましと宮かくてかり
また法せくせのうちとちなくめてたかりけれとも法物語
こまやかに世のとゝのさまを仰けると 案 承香殿の女御をさし大

名はふちつほと申しかとも女三宮乃母女御にておはしましゝも八は
出入もなくて朱雀院の院の御物語ともなきにやと也女三
宮乃はゝは朱雀院の院の女御也
女御もとより母の世をさすらへ給ひんはかなくひかると院のとき
也給ふ年比ほとなくなりにしとおもひさたまりて
宗 女三宮より世をさすらへ給ひんするもの給ふとも也女三宮の院
年十三さいはかり給ふ也
こゝろほそくこゝろにかなしくおもひわすれかたくしてぬるかりけるの
しおはしけるとこゝろやすくしたまふさまを給 宗 女三宮の院
ちかまほしきやおもし此ひめ宮そのみ 右大臣家此女御たちの
ちかまほしくいふ也
此世にいひしその後もなく給ひし院 宗 女三宮乃院のをはしそこゐ
御きさきと此院との院也又詞也 細 朱雀院の御事也

女宮たちのあまたおはしますゝ中にこれよせかとおほえ給ふを
宗 女三宮乃かんなと此院のこゝろ也
院にぬかかをもほしおほしぬへてきこえさせ給へるへうちなやみ
そなしかも女三宮おほしたる院に
古 尼ぬまゝにぬかの御つともいふへきみえすなりしさまみ
はかなくしたまへるむしなともおほえなんいとにわれし
くちおしき おほつかなくしく 宗 うらくもしなわりなともよかる
ぬんなへし
いまさらにかやうなる院のありさま給くなつかしく院んとも
めてたくおほしきこえよ 宗 女三宮の院給ひしはかを給ひしく院とて
のみまつりなん時女三宮をもてあつかひしるなとも也たてく
こゝろへとの院の院詞也
その中にもとりわきてあはれにおもひきこえ給ふ御ゆかりの給り

宋 女三宮ちとの中あしも母ちうとかりしまいほどそのまへにゆかり

てんゆきうれとや

三乃宮ちうん心そをちすれとくひますて 細 院やまもまさらはうりてや

ちくひとりもとちのともろくひく 宋 女三宮ハ母もおりしま

さは文帝ちうともとゑのと給とや

うちもそくん後の女にたくよひさもうくんるすいとうしろめ

くくうれしく給と院めとしのこひつ 宋 帝院隠遁乃

後のうるや

中たまうまきを給ふ 宋 ま宮へ院乃の給ふや

女御母も何らしきさ後りゆうらまも院も給

み色継母ちうれともよりと思ほしめさてゆうとの給や 宋 承香殿

花 んうつくしうとそのむすめも后ちれさ後との給ふやうと

されと母女院へまりへまさらうそて給めさ給ひりなされいと

ミうし給ひしほと院ありしひとともきんうあそくうさりし

うれえ此の給母てもに今まらまさともくしちるとまちすくと

ともさうとにむそくめてやひうしろうんやまめてハ思ほさんは

まやとそとてしちうくるうう給ふ有り此院うるをおほし

あけきそてとしうれゆくまくに院ちうやうまもまくとにかすくな

つとまめさうせ給そくは院乃とめともいてさくを給つきとのまめの

前みくとしれくちうやまるを給ふるを有つまといとのく

うちうくへとやるちるれさ後めをれうしまをさくつをとも此

うさひそを給うをうりたちうさと思ほしめくまうろ院くくる給

院うそ給へ連ハちめとそ乃せうりをめのとそめまうり給ふる

宋 承香殿の女御と承香殿とハおうそひ給うく院中あ

うらし給まうれ此給ま女三宮をもとうくハ思ほしめさ

しやや此朝ハ前ちまれ批把郷ちうるへし 細 此承香殿乃

女御ハ藤つほの女御の御事をいふ也ひとゝせ入内ありし人なり
廿年よりまへ入内ありしもの也心にかけてかゝりし事を思
と朱雀院の地よりいふ也
人くまに今もちかくおもひてよくしめてたまはぬ事を
思ひ給ふにつけても中宮の御むすめの宮をはくくみて
ものし給ふに又朱雀院の女三の宮の事をおもひ給ふあり
かくも思ひ給ふつきもなくさめかねて院もいとくるし
くおほしめすきみ　系　朱雀院ハ位をさりて後ひさしく御なや
ミ給ひていとくるしくおはしますにつけても御心よ
わくのみなりて出家の御こゝろさしふかくおはします也　細(キミ)
題にきく
御くらゐをさりてもへたてなき人々の御事也
中納言の君と申す夕霧の事をいひてとしころのこゝろもち
ふかくものし給ふ也　系　夕霧源氏の御子也まもりまいらせしも
よろしきやうなり

左の大臣のむすめをたのみて中納言の御事をいふ　中
り　系　院の御子の夕霧に給ひて源氏に申させ給ふなりとも
此院の御子也　系　源氏は朱雀院の御子也
今此うちの院はいまたとしのわかきほとのみかとをさしてい
　系　冷泉(レイセイ)院の御子の御事也
おほやけにも人にもあまねく思はれて院をおもひたてまつ
る御事也　系　朱雀院の御位をゆつりてより冷泉(コ)院の御
ゆゑにみかとの御心もいかにおほしめすらんとおもひやりたる
事也源氏にむかひてのたまふ也
ちかきころはひとのおもてのあはれをなけきて思ふ事ある
を　系　朧月夜の尚侍に左遷(サセン)のこと也これも朱雀院のおほし給ふ
事なれはいまさら思ひ出給ふ也
年ころよりおもひてそのことのかゝりし事をさしてありしを

まうし給はぬ　栄　源左近(サゼ)の中将をかうふりも帳を朱雀院
へうし給はぬとや
さうしきんとふとゝのへりあらぬ道はとゞまりてうる
うらわかきもそまむらひかたしゆかしき事なれはあはた
うりおほうりあり　栄　これを宮のうちになれはいはしうかし
ことのむくひをうくんをうるまじはあしへと宮しとや
いふあらんわかにいうその住んまへはこふかへうらんと世人を
おすむさうるひある紙　栄　いはれある時あり源氏の帳の事
うをおもし給ちんと此上の人もうるひしとや
はかたに志のひかし給ひく　栄　源のうらそとんおんし給
姫とや
春宮なるとめとんせうきも思ひ給そりさ又あまく春しう給
忍ひあるとあり此ひうし給るをとりきめとあるく心あるひ

なるへし　栄　源氏よろつまさりたまへり今はきりく春宮へ姫
君をとまいらせ給ひてもさしきはもひとあるを語る
くらう様しく朝夕しめし人との院の御胸や
本性おうるあるにそへて　栄　院の御本性(ホンジヤウ)おるかなるをもきぬ
心ののやうにうちまうきくあるさ後ろや思そて中く
うそれるおにゆめしもわちあはれさめて給ふ　栄　春宮の御
ちゆうあれるとくなるの給ひて上それのにあまりひ
給とや　何人の親のんをやうにおしらねとゝもなるをおほし
なりきのこらひぬるか
うちの御けるはの此はゆかしんさうへはほうまうりをきさて
しうとも　栄　冷泉院の御けるや桐帝(キリミカド)此後遺言(ユイゴン)のことくに御位
をまつらせしまするるとのなるや

かくも恋の世のありさまれ恋しうきころの法なりて
ともわらし語ふ法の心をつくしまうくちん　栄　冷泉院
をも天暦の御代にありしへ猶まつゆくは書をうけき
恋ともやなりてさをもわらし語とハ先代までも両
朋らしき法とれ賢人とおもくまし由もとの心や
これ秋の行幸此後　栄　前の六条の事に六条院へ冷泉
院朱雀院法幸ありし神無月のこともとれ秋といふ事不
審也但夏ハ三月唯しくハ初に准ずるゆへに神無
月なれども秋といふたるべし　花　十月を秋といふ
まちも定まるゆへや又一年を春秋といふ夏冬をも
春りとるとも冬をも秋となるゆへや　拾　春秋といふに
夏ハ春り属し冬ハ秋に属して此儀あり拾遺に部分
十雑の春に夏を属して此義あり行幸ハ十月也紅葉

秋とうなりはまいりしも羽ゆへや　細　あちのうち紅葉此行
幸ならし十月なれと秋とまうさむゆへや此なくひあり
古の事とさも冬くゆるゝ折はりうるくなん折節の語ふ
冬ハめんりゆくゆへこさうとくも侍り　栄　行幸此以後いまく
うちへく源氏のひとをゆかしう折りしめさるゝ心也
うちのもとうのひ物し語へさまうしまうおりや語へ
あとうち志かもれつくの語りは　栄　源氏の法事の事ありちれち
これの語ひ色にそてとむの本語よし中納言の院の
法の給ふや
中納言の恋も紀侍りなんとをもくもとひ給へるに紀とる
くゆ　栄　夕霧院のみかとへやなるて羽や京をれ事へとう
せうありてうつしきさゝぞんせ法とやさまとんのうれ有し
との語ひし給へし　細　先とうと夕霧は返答也一うら初か

の時のことわすれを何とも思ひ給ふまじきとや
年ごろといひて我御心をはなれまつり給ふおもひくせ
の中にはとまり侍へきにもあらぬほどなれば 宗 夕霧を
とぶらふべくおぼしてみるにや 河 うしろめたくやおぼしけんと
みえ 細 夕霧はうちとけたるにや 孫 夕霧十九歳なれども
あまりにわかきよしと批判
大かたのことにつきてもうちとくる人さへありかたきとのたまへ
ることを 宗 左遷の時のことは御勘気の院の御心をたがへまつる
ことかくはかりなき心ざしをおぼしめしに申さるゝ事と給
ふもとゝ夕霧乃心つかひやさしさるや
いかゝ色に出てしきことなるにてなんなるとうちかたぶき
たまふおぼし給ふもとなん 細 まめ人なるまでいかなるにや
まうけにうちとけてまうでこなかりしぞ心もとなしや

かく御後見をおぼしまつりつかまつらせ給ふ 宗 源氏禁中
のさまにはかはりまつりたまはしたがひもしやせんかとおぼしや
さらば乃いひをおほやけのわたくしのといへりつると申し後へ行けるを
とらへぬやうにて 宗 閑居(カンキョ)をこのみたまひしとも御寓居をのがる
身をもてさぬやうにしなし源のことを夕霧にゆづるなり
古院の御心ゆかんのことをよくつかうまつれ 宗 院へ源氏乃年
たのもしげなきの詞也 河 此御寺に云也 弄 源氏より大事に
つかうまつるべきことをも仰ありしとや
御こゝろにかなひまゐらせし世あれ 宗 院の見んとの位の時也
細 是は源へたのみたまひしや いまさらに後仕れおもくなるとおぼしめし
うけたまはるや
おもひのほどとも力のかぎり物とをかれ 宗 年ごろよくうかれ
箋(キリヤツ)ともいふ此時分は何ごともおぼしめしわすれたりしとのたまふや

ひ
これはまたる人々ニ荒常にもありけるしるし也
しるきうらみ人に聞しらせ　聞　左大臣以下の事也
そのかみとはときそて給ひしせしられしのをもおもひしきる
聞　左大臣以下乃さまさゝと同じにたまひて源氏申し給
関白を給出されしをもおもひたまひしとや　細　思ひとおなしに
まひ時ありその人乃行幸とともにまさしくなりきとや
藤八郎くまいりてとたりて左門へ相つかまつるを思ひひの
うちまとめるそてさくらへなかり給ひしまいらせ給
聞
朱雀院行幸の給ひしとや
さしつかひにとるく行さすれ人のかを給ひあて　聞　源氏太上皇
の事也
そのつる月日をとゝくかひなくあんおりくおけさせ給ふとて
いし給　聞　又やうに源氏の時ひとつやまりてやかて院のみかとへ中納

云そうせし事也
廿あまりにもなりぬる程なれはいとゝそのひとつくしくて
うちゝとさかりすく人あるかひあかぬくちをしさをなをしめり
ちくめてうちまきまくしも給ひて　聞　中納言十九歳の時也夕霧
は院乃御つほねにと給ひしてのたまふ也　花　夕霧廿まで
らんとて乃前の年十二月のこと也　哥　夕霧十九歳源氏
卅九歳也とそ
ひきてこゝろをも給ふ女御宮乃ほとしろしらにすれともやかたにへし
まはおほしよるにもあり　聞　夕霧を女三宮のうしろみにせむとや
あるとおほしめしてとや院の御心也
おほきおとゝ他をむかしに今はなとつきぬにたりとおほしはかるころ
えぬさ侍りきこしくてとおもふるをしとみてやむをさまあらる
聞
院乃御病也内侍のかみに奴給ふるのをと思ひ

こゝろには語らふまゝにてあ達との給ひける時もしきと
聚 女三宮の夕霧を思ひをはなれきこん物をとの給ふらんも
細 女三乃宮しろうとにはと思ひけるとも
ひとふの給ひける事ありとおやしくかひなくうちには此宮を
めくおもしろくひきてける人さへあるしもはつきてらうたくせを
もおもてあれはやとおもはんおもひしの給ひする様をのつくりもと
ゆるし給ふかなるをも御ゆるされて 聚 夕霧なんと
さやうれとちかめやとは思ひぬれと心にくくかゝるもなにかはいふ
色めかしきこと 聚 まへく女三乃宮はしろうとにも見給ふを
中々よろひくきやうれなるかたと思ふまんと
たくもうくしらとも侍らぬ方めもこの人と似かよひくかたのこと
世とえぬとてそこしめやらぬ女房なるとはのそれもおもはえて
てへとみゆくらとも見たくまひくちからはそれ何をみせてたてまと

あつまりて見ゆるをなほ志くるるは ゑくつくらをとも候らぬ
聚 夕霧ひきの詞やらる人とは雲の名残をとさくるにやう
にもるとや思ひきこさるや 弄 禁中ならぬ木の時也
細云 ふかくしきこの詞は出せり 細 夕霧乃詞
そのゆるさとものはれの人の身にわたりしの宿にいますゝ
もくひめに後のさめたといとぬるもあやにてちかうくにほのし
給ひしかれともひしろくをとをさこゝめして 聚 ちう中に年ごろ
名女房もちかるとも中ゝにかの夕霧は清(キヨラ)なるとも源氏のは
年の夕霧にとの御ほとりおほしましし時にはかひ給ふ
しとや
まことにさまはいとゞ御ことを申してく 聚 院のみかとは
詞や夕霧の御うの給ひと見て世の人の給ふらや夕霧は源氏
の子也 細 六条院や以下源氏のことを仰せて朱雀院乃

の給へるなり
今はまことに此世をおもひすてゝひたみちに心へ入なんと
やとおもふにつけてもいとおしくおもはるゝと也　箋　いとゞ源氏の思
ひやらるゝ方はいかなる給ふなりとも源氏とおもひしと
まことにいとほしきとや
うちしたゝめてかくしきとにて思ふにかのあはれやう
にあとさきもたぬやうにさるまゝと　箋　源氏の実ある情の程を
んの給ふなり
又うちさきてなどかれともたかひなれはかたちへにたちかくるに
つきてはある物をあいなしやつきなくしくもいとゞ
のなくひさしてを世に有るまじきれ　箋　源氏はさやうの時をも
名物をあひくと思ひなるや
ありけるをさしていひける人の後を

あり宮のうちにおはしまして　箋　源氏の思せしきとの御めの
御つの御時也此頃は源氏のよるなり
帝のわたりなくてかくいひしてはかなくなりけるなめり
つきなかりしたゞしくおほしてひさしくなりぬれはいとをかし
なりて　箋　源氏を禁中にて桐壺帝のしつき給ひしことを
のたまへり
二十八うちあそ納言なとなりてはさうし　箋　源氏故
院よりそうつれ給へるも廿九にて中納言にならる
もとは源氏の君ならしもとや　河　六条院記云加大中
又任参議廿三兼右大将廿二貞信公号泰三年三
月任権参議廿一三　昇　惠或廿にそちとあり
細　源は廿一歳にて参議より任しけるそとはいへるに
ろさく宰相となるとも異下し給ひしとや

廿にあまりてや宰相中将なとを給へりけん
某 源ハ廿一乃とし宰相中将なり給ひしとや
そまたくれなゐいとたかくもてなしたまへるはつきく乃子共お
ほしうのみなさるるなめれと 某 源こそハ夕霧ハ十九まてひく
き官位をたゝやくもてなし給ふとや
まさとにてしるしたるのなくびもちあるなとへられこそおほさくお
とゝまりしく 某 源あるとも夕霧ハおとなしき給ましきこととや
あやまりてもめつらしきまさりたる御ほとにいとなかくなめりな
さためてさき給 某 身ハおやまちあるも御心なしきこゆるを
ハ源あるとも夕霧ハまさらんと院のめてさせ給ふ也
姫宮乃いとうつくしきみくわくなにとかなき御ありさまを
みるとうんまう給あるとつゐやしなまうちそ
姫君 某 女三宮乃事也

まうとおもひなからもとゝハ人かくしと也 某 おさなく
しき給ふをと云り
さこしつるかうらん人のうしろやすくうらんまおつきまいらせやらるゝと
申し給ふとゝもにきき給へれとこもめしかそく侍りきての御ことはす
ゐとの給ハもるはいそてり 某 院の御心女房たちの中ニ
ての給也
六条のおとゝ式部卿のかんこれもそてめおほしきそてかんやうに
此宮とおもひてもくてまん人まゐれ 某 紫上乃ことを院の
女三乃宮のめのとたちにかたり給ふ也
女房人の中ニあまた御さし 某 年人のことゝ云り
うちあるも中宮御方ハひ給つきくの女御たちなとをいと
あんなるにたりさるをおほせらるへきにもあらしさうしろあつく
てさやうのあらうしひいとなかくなまんこれ按察中納言の給ひ

のひとつきにつるほどにうちなきすみてそこはかとなくうれしかりけれ
わりなれといひと　宗　秋好中宮をこしめそれ御中むとるれ
女御たちあまたハさぶらふべきにはあらねど女三宮
その中にまじらひをなさるまじきとや
さやうなくにおもひたれそとのまじきなる人めしてほめ給ふなど
の給ふは　宗　夕霧をほめたまふとそや雲居雁などもまさい
ひあつきはひさしきありし時女三宮うちろこふるすとの
給ふんぬをとや院の御心うちなるへや　逍遥
中納言ハもとよりさいひとまめ人なめてどしたも　宗　女三宮のめ
わたくしたち夕霧れたとと中納言也
うれしまるきにんをとりもそて御ゆきしに思ひかけるなにくも給ふ
給りあらたるのこひうるすひてハいとゆるくなく給ふし
細　雲居雁乃なるなり

かの院こそ中くなかにくわろきにつきそもしへをゆるしくおかし
しあるらのもてなしはせあのせさき給ふれ　宗　源氏をいへども
らうたけゆかしき給ひしへとやその中なるくとも上臈をのぞ
き給ひしとや　細　六条院也
あんとまち給ひかくるかな　細　紫上の御事
まとめ給ふんのあるとや　弄　紫上をも本妻にてなくて
花散院あるとをもとめ給ふにまかひさくるそうつくし給ふすれとや
も　宗　権乃宮はまさるへし源の本妻ハ女房んとある給ひ
し給ハ紫上も本妻にて十あまてなしめきぬ文の心也
みそうきあらそあなたにてこそハいとうろあなたけまとハの給ひ
まされど　宗　あさなきもとこ心也源のなりせ給まつをもあさく
しさきとのあんの御のれんや
きたにたまうこのあそハうらめしきかりうるへきこといひそあり

ともにかやうにおもき海にしづめられかくさまやゆくりなた
ゞかりしうちにもおぼしめすべし　栄　源の思ひ入さまざく
の中には女三宮の事をまうさせたまひける事はおもひしられぬるも
源氏をおやのやうにたのみなされてありしにゆくりなくてきさせられ
せうとおぼしめすべしとなしなしまうして其の祠也
ようさてありせんとおもふ事女こゝろをもちくはしくかくのこと尾
あるまじきは　栄　院の御祠也女宮をとうかんするもあるべき
んとおほく源氏の御あつかふにそまちかくなるをた
こさらしくや
かれなくをまうりとられつくはく此世のあひさはさてもるさんゆ
女宮さ海子のくこそもくたまはしかれ
かれたくせ　河　解也　細　前なるもあるさきや
ゆくそくあしく哉　栄　久しくつね此世にまゆうなかる人かきそ

をのこくおもくまうけししかれや人とは源氏也
かれ女房ことにおもふしたくくなりともくなくさもつ
ひとうちなかしてなりしけるときさらんおぼしし
栄
院乃御方女たちは源氏の兄弟なりともおひく逢給
りんおもをとゞや　細　女あまてあしくうるしきそ源あそ給
さむくるべしとや
まして女のかなさもみまんいひもとめるもさゆやとの給ひを
て　栄　院さへさかうにはおぼしめしてまして女の源の入り
あさむくるべしとりそくなや　河　弁ぜくたまんや
けんのうちにはくむもの兄乃子をも思ひしそてら房にしこの法
らうとものゝ中には　栄　兄乃源まうて八おんれはにおもて
くんの兄は弟をいはくし給て法んのうちにはまうとは源
ありぬべう思給もありとまうなきとおぼしめしまうるん

あり　細　さうしの詞也
おもくしきはめれとのせうそこ　栄　女三宮のはくしうそくに
て八月一のめれとをおもくしきとハいへりそのほれ沖まり
左中弁と云あり六条院のもとへしく文の院の御
のもとに参るへき人也是左中弁参りたるつかさ
めのと院乃御方女三宮れとを源にあつきをうされしき
よしまいらんくれ給と六条乃御方よ参り給らんつかく
の時くらうさやまされよとめのとれ申也
左中弁まるとれ院の思ひさん女てよし給ハせまへる
前御方　花　六条院の院司兼てるとい子なや
細　系　あれかの人也
此家母も心すると云と下くはん人を参りたるハおひく給り
よきなる様いてハ　弁　女三宮をもたかるきあり

らへまん志るく侍りしきおりて世のと給ゆしを　細　めのと
左中弁ハ御かはりにまらるや
かの院の御かはりおくれもくし世のにきを行人　細　六条院也
まんくさら八ひとうとおりしまはてゝ八まに人のするれとさ侍
さまにハつきてくらうを申ちるにるハつまやまも法ゝろゝし
行人へあうそたのもしきちなり　栄　内親王(ナイシンワウ)るとハひとうてすく
八まにハ乃るやさりとも可然法ゝしうとれあるたのも
しきぬるなや
又まよ人まよひ世のと給へさんへもあるまれんとのまにハはらうま
つるとてもあにたまりれ文法の人おゝあらん　栄　院の御乃
みつり女三宮をとまんしちるよとうへきんへともうすいとのき
とくかれとの事也我もやつきとも法しらるまへある
しやや

わらはへめしもあらてとのつらきひのほとりにともおもひ
ましくろくしき心にもあらんとおもふにいとさうきをとつ
らひしくらん　案　御めのとゝもなまさとあるまし
のことをとりつくらんとはつうけらるゝなとや
御らんせむ世なとゝもかくもこれはくのなまうけにとて、つ
こまかりようからんあるへき　案　院の御生世よりちは女三宮に
御らんするやうめも御とさまうてかめるとたん中まて
くらへはくへとさんとや
しこれはちゃ心のはまりと女三宮ハいともかくも御さいちくくお
ちしき院のよりのまれたくみつかへまうしく　案　かくおほすさん
も女ハこゝろくせなしまゐれ袖なれたるやうなれはうしるゝある
ことうおもんとおもけくしくめのとのをこなはれ也
かくなまよる中にはうちよし心のうちもなまつまてとも人

のこねさまへらめる也　案　女宮たちまてさくゝまし
中には女三の宮をとりわき心やうにおほしめさはるのこるをも
の女宮たちはめのとちからもなるねとらんとや又これ
もちりをもとはへなまうしやおり宮も弁はくうこ也
ゆへちりをもとはへなまうしやくうしぬよ　花　常夏なき
の御やうきそる心もあへりもしきそをもなましとのん
なりも又かみさまなく也
弁のかんへき後ともおもあらん　案　めのとは左中弁なる
あらはハ六条院の御ゆうハそまたもかとかあらんと蒼あり
詞也　細　左中弁の詞也
院ハおやしきまて御心あくろくを見て御見そめ給へる人ぞ
御心さまうたるをも又さしも心うらはりあるをもかき
くはつまてかへつてまへる給へて給ふうけ心し給へれそ

宗　源ハ人をすくる心はありても何となく見ゆる物語し侍ハらすは
なり給ふや　玄　弁胡六条院乃事や
あんとちかく思ほしめされハうちとけてひとつくるもあれと
宗　是ハ紫上中甚なく一段のてゝあハされたのことき人
人をうひちたをさひのやうなるとや　細　紫上乃事や
玄　紫上をうつせや
なき後にもつくそうひかけたるをきこゆるし給ふかくしこそと也
思ほしめる哉　細　紫上ちりたるをきこゆるもあつ給ひてこれあるか
ひともちかれとや
浮きくせありてもしさやうにおもひしまひやうとも有るそ
いつしき人と思ゆるとも云ちるすひをうちきうち給ふと
ハえあつしやうそ八条ちくしられと　宗　女三宮六条院
へ御出ありても紫上乃やうにおつくそいとしきも紫上と

すやうも女三宮御みせしうち立ちすくひ給ひしとやきされとも
まさにやうけはんとそくうちるへきや　細　さぎんを
おうとくのうひかれもちかてまりくていつはにとや
様ひとやうそうちちかろてさとありてちらん思ほゆる　弁　弁か
御やさしくひとくひく又様をうつるたとさあんし侍る
おもり給ふしろさてとおちや
かうは此世のさうへもちの事りもてさけにんをとちたるとも
おさき紙女仏をちらみてちらんへのまとれとも思ひかり心りう
ともあうぬるをもあるやとすんはひまうちうへぬをさひともに
も思ほしの給ひ仏たる　宗　源の此世仏を待をもちのよりなそ
紙をさうていやうれも源乃まんくうるや給ひしを
弁のいぬれにかゝるや源の給ふおてもなにそうやそこの給
なりたるされとも女乃をちみそくの事もよれそと思ふとハ

勝劣親ゆへにた遷のうすや我ゝ女をもあつぬるすあるを
ハ清見不のうす又紫上ても本意すゝるをかるくちるを
のゝをはかくうるゝ給ふるとかくるや　弄　源氏のゝや
本意ゐとのちもれんや　細　源の自謙(ジセウ)や我身の上
すかるくあるうすハるれり本意れなうくとくもちるれの
ミ不覚(フカク)くたまるとや紫上をもんへうゝいゝきれとも忘さく
にむくへ給へる本妻(ホンサイ)ふえおくまて
きこれをとの宮へくの見安きうにもおさちなん思つきなれ　宗　弁の
まん〳〵源のゆ揚称(ヤウタイ)を見るにもさすかに本意しとやさ
にやうそそひあそそきたることとそや
うさくにつまて清のきこいくし給へる人ミれまへ人あゝくまて立
くる連隊ミそれにゑてまんゝ給ゝりのとゝうきまとあるたくへゝる
あゝく院の清よく結はふゝゝ人ミさ物ほゝゝゝすすやハ思わし
める　宗　紫上をはじめてとのゝ源氏の御かたにつくれぬ給
へるも源氏お草(サウヨウ)のへしみてハすれとのことをと思ふ宮量(ヰリヤウ)
れ人ゝかくはといふうきミひくくもえそれ人ゝくをたちく
さま違ゐ人ゝなてハまうれよりやうそきをはる年ゝなとのみ
なてハ源氏の御身とつひくハ源氏すなゝすへき覚(オホエ)のぐ
しかるそちされとや下々ハ女三宮お臨みんとの色らハ
なり　細　うらく思ほきれとミれ十分なゝしたるたゝ人の定
そまヽにかなりくてきもにきをもおうしまさそいかにそまくひ
女の清心もひなゝんとかゝし御をも　宗　女三宮にお(?)なゝと
いかにもこれ清あれもひなゝんと弁かるや　細　女三宮ハ母の
かりしきにとくいふり
めれと又るこれはそてにたゝくなんなにうしれ紛はよほのめし
侍るれハ此のん女たちなゝくゝきまひさきやさき給てん

案
院の御うしろみに左中弁になりたりし又弁のおほし
ろすなるにや
年比の御後見いかなるひとかおほしゆる人になりたりと
御ゆるしなどにむかへゐたまはん時は左中弁に御口
と 案 女三宮の御かたの女房にこたへんと左中弁
へそなたをも思ひたまふらんとおほしめす宮を御出あり
せさせ給ふにおきても思ひたまふやうもやとてかく御めのと
いかなる人に御あつけかたおほさんかとくにつきてひとりのことゝも
御後見を中弁はしめ給ふにいふ人を左中弁とおほしあり
案 是もかねての御心をさへ源の人になにとも
しらくもさくへきことなりとも 細 めのとなるへきたゝ人さへ
ちくしりあら中に入くはいかにや
かくしてはいとゝひとりのかへりむかへなとゆゑにひとの

ありぬへき御ゆるし給ふ故 案 是は世の人々のおもはちかひに誰人
のあるかときこえさせむなとまして宮なると源氏
へおはしましてかへりたまふにおほしつゝめさまし
とことしもやおほさんとや
めでたきことしまやかなる 花 是上にもおもひやられてま
しまさんするとやよ
さうしろ見のたえ給へるをなほ御まかせ給ふなり
めでたきとてそれをかなしく思ふ 案 女三宮をのたまふ
かたまてふかくあさしく御思案あれとめのとらや
給ふれは人を又ゆるさせ 案 かくれなき上臈といひ中せたれ共も
いまの世にやうあらてなされはかりかたかるまして世中を御心と
もてしなす人にもおもしろきもの姫宮の御さまうへく
御かたへさしよせて給ふれはやかてさせ給ふ 細 上古先

るすハ實義(ジツギ)なくあはれやうけにくまりなき事もなくなる
なる紙とれ世を経けり
宗　當代(タウダイ)の人をきらふ人なれとも世ありさまもなんらうしるかと
のんをはつかしやハたり世中とみとむくさんとさる人
もあれと女三のみやことのかたにおもふかくしきはれ
みて心まとふすとさとてまいるなり　花　かくいつかうそ
第一のは調達(テウタツ)さするんやまさえの世を以てある上﨟な
ほとこともよろつり給へるなるくてハへなおさむつるなる
の省へきをといふや云く　私　第一のおほさるゝ物也云く
弄　よろつり調達しなるや云く
ゟ　かく婉人いはつきまつるはなたてそ給ふめ　宗　それも宮
つくふかとくてそおもあさの事にいはさぬやさしとや
抄　宮はくへかんも女縁(ニサイ)のいはんとてそやさぬと云ふや

たゝの法にとさてにたて さひ尚をて法くしさしとく人をもな
ゐとさにむつ婉とそ云ふよりとあるまつなも給ふめとなまをさく
たる法らしろまものし給ハ法しん事を給ふかなそさまことさうなん
侍へこさせまの也　宗　大略かすハ女三の宮此法んすゆかれるさし
きと下人をもおほせにてそたてさうんとも重法給ふまうむく
事ハ省まうしこさなる也
たつとひきとゐるたようなん　宗　我もさおほしめすとの院
のかたの法ことなる也　細　朱雀院の御
みこちのうさたる省給ハうくてあもくしこやうふともあり
宗　内親王(ナイシンワウ)の縁(エン)あり付給をおもくしとさてうくぬとのみ
あり　花　皇女なとのさらくし此男まち給ふるやを
弄　乃ことたちのまさうし此男まうき給をはめぬるやなの
調りしさかれにさそやふるも同しく女の男にかたるに

つまてたちのあつまりをなすへてらつるもこと
又そのたきえをいへとも女ハ男にこゆるにつきてしそくやし
きあることともめさましき思ひともとのつくしうちましるさ
さちあめれとも川きんるしくおひとくるとと　宋ゆるれる上臈
とも女の縁(エン)すりつきさそるにきて十ふせぬるすくゆしきこと
とのあるとや

又さる人こきんのすきちちかくまて女のむつあ中とまにおぬるの諸
宋　父母そのおりのそのことたる人たちもくれてとや
んとをそて女世中にもくさんるかも昔ハ人のむそをつくりにて
せりゆるけるまとしきゆとのるまといひもそまちぬ物とおしくを
母ととの世あそもそしくしくことるとうりしきこともあるより
かまそて少あめかりし晩日まそてそるさき親の家よおのめくまて
うしつかれし人のむそそめれをかそあそしくしくまとさそ

のまた物ともにえともちあさむしつまてく
宋　人ハそのむへるもたゝるまてまうととあ見をは世のまかまん
かをいへとも昔れ人のきくのゆるさぬ猶ハ人のなかひともとりけ
ぬすにおくひされとの世に人のむそをりとうしくるれハを
しちちあるかるあるも実く世あるもんのまさくハと手まて連ぬ
とのんや昔ハ書人あるとなとハ聊(レウジ)なあもとうさくうしみや
鶯乃心胡也　河　平ハ切韻(セツイン)ニ云正也利也易也
ちるにおやの思ふてをうきうゑととうりしむるそこひおほく
也ゆる　宋　色ハ書人あるとのかしきさるへきところあひくなん
たてハおやのためてかを思ひゆるやかよううしとぞるある路
んや次の句すりの思ひ緒あつりしむるやへおやれるたりけ
てとききんとのんや　河
河　かさをこもも見とかくれぬ春の花のあまてをかきつるくある

いひすてゆきしハみなおなしことや思ひとくにつきてもとくせられと
いふあるをハきりのことにとりまれたまふりしたあからん
宋 人のもとくせとてたましゐまのきれと云ひすてゆきしとたまふ
こともくはまるもむかうすとやまたにつきてても女三
宮んもとあるくお(?)しめ侍とや 花 侍の大事あすくし
ゆうころこまち給へる也又おやの家にあらめしまつ人
のむすめれなるとくしきもとに持りたるをたちちる所
おやの教まてあきにたかると云ひすてゆきしなきあるを
なるさにたるらんやもと 弁 言下(カウゲ)同るにやもと 細 同しまゝるを
かせた同るにや也
もとつくおしくともよくもきるる人さん人の心ゆるしきゝゆるまく
みて世界をとをく思をもとくしてよく後の世よおもひるにあ
なほ時くもミつくしのあやまちあしもあらしきと 宋 是ハさらぬ色門

のうらとの給也然ておやちるとおれおりつきたるまてあるくとも
ま中たのちおしきけにまれともとまハ女のとろかそ
あらぬるにや縁合(ケリヤウ)おやのそれ男とせんとろんしあら族へし
細 善悪(センアク)ありつきてたやのけさめたるにハあいしれらるを
のうつるにや也
あり為ておの肌こさそんさなひたつとめやもそれにたる也おやとへハ
くるあるもあいくしたるうるにやゆまいとあるとたちちる地をと
うちこさるつきたる時ともおやにまてしまてけ 宋 第一女のちう
然と男におひそあてけらもぬけのかましともとるそうらうん
なほたちまれともおやにそくるつもとけあまとしてけ人をもあれ
中一のこきとけそとや 花 是ハ下におやにまてしま侍さる人さ
人もゆるさぬうつら無ひかさしたる女のるもあるう人
てハちうれきさんをのハあうつめやもそれるすにいあるくとともあま

とまれかうまれさたむる時ハいとつきなくおほゆる事こと
さる人をこそゆるさぬ事にもしひたてゝたる君無
女の身ハ又ましてたのむかたなきハ心よりほかなるさたなる
細 孟子曰不待父母之命媒妁之言鑽穴隙相窺踰墻相従則父母国人皆賤之
あやしくきこえの人のあやしひめてさるにはかなくつきゝえたる
なり 弄 さやう成女のこさかしハ下す也ありてもさへうつります
て上臈ハとやう 花 君常此人の上ありてたゝみありてきく
おほゆるにましてし上臈なるものゝうちにこそさもありぬる事と
よろしの身よりきちあれてある人さへあるそとありぬることへかしう
ほうゐんあるをものきせる宿世ゆさめくまんちんいはゆるくし
くとりのまゝてちかし宿世さしるへくうちあるを
弄 是ハ我身へ女の御身もまされるもめるむすめ

こゝまうきぬへきも心にもあらぬせさるにハ料簡なきやさしきれとそ
ましとも下らん人をまたんの人にもかへさせの中
ぞかしもろこしにてもあるかにもしかくしつかそとや
花 三界唯一心心外無別法の理なれともちもあはれさもん
とちられまて宿人にあらさるやうに 細 花鳥三界唯一
心云々 かくのことき一心の事を云られとも又ありもあるぬる也
あやしく物をえられきんしさる也 弄 是ハ女三宮の事をいふ
院の御心也 花 是よりハ女三宮の御事を云也これ
うまれけるもとそ世にゆるしなるも姫宮ハ何とかもましま
さぬとあれとたちのかりもあるをもそてもてなし世ゆるさ
まに院ハおほしめしたるなり 細 女三宮の御事なり
うれうる心ありてあまてなし世ゆるさやうなることの世に
もとめてんといふとうきるもありなと 弄 あまりさ此めのとなと

わかよきあひをこそきん不慮(フリョ)なるうちに出してハらへたる也
細
めのとちかきとの心ハさらにへたてと也
かんきてなきり給そん後の文をとうしろめたきにおもひ出のしさき
給へる也 孟 かんの清らんさんのくちかかけを給ふうとや
心よくかうつかうくおもあへり 孟 院乃清心の乃給ふむと思て
めれとたちかうよくおもうつくしこきうけにおもひあへる也
細
紫の上のとれ也
今まてハ物をもえしうし給ふほとまてかきくさんとえそそ
とえ給んしつるを 孟 院のみうとの清額也
かうれほとゆとおほえぬへき心ちれもうるにおもかよされてや
藤壺の六条の宮とくハまたいたさむことも物のかは給てうしろめたき
うらちえうれいつきんと 孟 院乃清出家ときれきさき清命
ともあやうくれんてそ世にまうかされて姫宮の清ふかとやかく

とあつかひ給ふ也 弄 清水寺の清ものなうし出ほき
ろうくにあまりさ物せうかくへきへとさへくへきにも情くほうし
とてもかくもあらんか御ハへもめらう清ふ 孟 六条院の心えたる物の心をそ
てらゆえくおほしめせともいつもとなとそへめくうく物そ
しまきをさとも思ふハともうくこともさうしめさし薦(ラクキャク)にて
女三宮のかんくうるを也 源氏より乃心をさる故にもとき人め
是をうし方をまへきさとの清心也 細 うく此方なとも
さうとも清にし給へきと也
のくちにおちかくて大かくのたなしとてもうしろめたきそ
ほくひあくかききく人よう 弄 源氏の清ふかやうと
花
源乃出とれ清有様との給也
さしてよろゐくへきくへそれたるきうハけむん 孟 院の御く
めのとたちとさんうし給ふ也 姫宮のうしろつきなるか也

高き人のかしつきむすめをもしつかしうおもひしさきもちめてことひと
にゆつりてほしつしもへしきさいにゆるしあへぬと　高き宮ハ　案　宮
おほけなきことなる也源の詠ニ桜乃ゆゑとあり
かたおもひきすちあて　弄　源と宮とこそ詠とし侍や
あまりにいつくしきひよりめく御とハおもひつくことをまてを
こころもあるおほせもやもとくにつくへん　ちかひ　細　あまり
にはなれたる心のあるや
推さる人にいと宮の事しまれくるんある　案　せ宮す此比とき
身のさしけなれとや
又大納言の家に家つきのさむたる時かくにあのまのあやるさ
多くさこそにハあるれとき源にいつかさやきやうにとうしきす
敷さんさちる紙めさしうしくちのんほるへき　案　是ハ朱雀院
の御勅別当也女三宮の家司とよ依付よろしやのこと中く

ちかり是ハ世務乃かゝりたる御をもたのもしく修りにこそちかひ
多き事ハみとも也　細。家司の御也家司ハ女三宮の勅別当
をとらう　花　此大納言ハ家司まかせたる人あり院の勅別当
多くし　奇　朱雀院の家也　家司一人　異なる源大納言ハ
とし此乃院の別当すてたちくはうまつりてとあり
同く是ハ女人の精をとの修也とて
家つきのそむたる　花　女三宮乃家司となむをとあり
帝王女選庶人事也
むしもうやうたるえうひあもん　箋　是ハ醍醐天皇御女
にてはしろうとへくるひ降て忠仁公をむこにとりたる
そまさとくにめしに引ん也
何すとも人ハきものあるおほしあるにとつくりてこそ宮を
也　案　常乃人ハあてハすく此度しかるへきうしろみこそよ

かくめとれんや
たくひなへりまうさうちすくまちひんさうちくるさとりしくれと
にこゝろさめんといとあらんはわしるんへさえさにちん
宗 さてハらくのあ紙をいそれ世界のうさうるとにこひたさめ
てハくちわしきとや
此黒髪を恥たるふたなるよし 宗 内府の子頭中将なれ
あり家にちしめて大黒髪とみる柏木なるなり
内侍のうちれ物をくれうし 宗 柏木の女三の宮なるを朦月
恋しく院へまいりたまふや 柏木れ毎ハ巴の尾や朦
月影の為めも大清の髪ハおもや
それ人たちりなん従ひとも思しめゝしさかとに
ありまたるとうハとも思ふうりぬへきさとまうしいと
とうくあも是にかるひかりとなりたうき心ちしけく

てやまめさくもくしてくさくまりまあるまるく
きん人へりハぬ春て作るとをさともるくつきあまれ世の
うるめと奴へきさんあれそ行をもさとのかしられと
宗 院の清んてな柏木ハともと年をゆきさ宮位ある河
うちくハしさいともあすく掛けしめきとも給ふ御
あれそうひとうめとや見えさんさしつきさや今ま出
人をとなきて中ともめあて柏木ハるし始とや
あると又此とめあくさそんすそうさきそあるやとよ
ろつま招けりつひたりたるやうあとも招けしよりぬ
宗 柏木をさとおれと姫宮のうしろ見にこひたさめん
ハふうやお心よりつひく柏木あも清見んあ給也
ありやたちくさうまくを雲しきなかのし給人へす
何やしくうちくての給りするはさしめかなる度をまのり

うしろめたうおもひかへりて　新　世人もけしからぬ事にとりなしや
なとはへらんにおほかりけるを　栄　あはゝうちとけた
まへるも中々口をしう女三宮を思ひ聞えかくさしめ
こと給ふをと守はべる人のあはれにきゝなしまへや
柏木さきおほくものこれは源氏のおもてにひとりものゝは
まをみつゝもちなくもてはなれにとうる給ひて
ともかくてきたなるわかたにさやうのもおもしきなりて
めしつかきしまいたらんときこえて我かみもめつら
くありてうまれしらんとおほしの給ふて内侍督の息な
ハ故　おほきおとゝ　栄　柏木の父内大臣の事也とたえ
致仕大臣也
あれかましてはきえ入ぬ給ぬへきをは　栄　勝月夜の母
定子は柏木の母也　細　二条の太后の也とめや

よろつのことよりもこれらのことをはなし給ひて給
ひけ給ひしも文給ひしを給ふ　栄　勝月夜の源氏女三宮の
ことを柏木にとそへし給也
右衛門宮ハ左大将のむすめを守りたてゝ給て　栄　鬚黒大将
の北の方式部卿の事也　富衛門ハ式部卿と見えてつた大
まはせ女三宮の御事の有りの御めし給ひてはまゐりてかくとうて
かし給へんとや　細　式部卿とのそえてゝの御事とともに
有給ハさうなと云り
守柏木へ深くもあり　栄　右衛門の心也式部卿の守柏木の事の
うしろれたきとさるこれへ母とはいつくしと女三宮の事
こころにはいてもあれともかくなれとものいとむ
ゐるかなしんとしてとよりもくし給ひたいたる八源氏のそこ
うきのうきなるをあつくおほしめしまたるを　花のうちなるゝ

まうきこゆるやんことなき御子なとにおほさるらんとそ

ひ給ふなりとそ

前大納言ハ弟法皇の御弟にてさふらひ給ひて

はかなくひまなれなるを御心しらひ給ふへく後より御事く

人のまうさるへきに　案　花ハ前ニハいし朱雀院の御弟也

此宮乃御かうしろにたとへきてかりんさもきゝ給へくはかなし

きこえたりけり給ふなるへし　案　院の御山籠の後より御

あはれ道よ女三宮の御かうしろにたのもしくおもひきこえ給へり

はかなうとりなしなんや

権中納言もとの御事ともえ給ひ　案　夕霧の事也へく

よろつ女三宮のことともやむことなく給ひてのこと也　細　夕霧也

人はなくてさうらふなりむもさる様の給へりしはかなしき

とかくおもりてしらすとそのふれなりにつけてもあしき

うしろめたきことにおもひきこえてそむかれてはゝかり

ところありぬへきことなれと　案　院乃御心にハ夕霧ハ

六条院の御つかひ給へり時女三宮ハ給ふなと夕

霧ハひとりもてなし給ふをおほしめしゆるし給ふ也

女君のことうちとけてよのおほえなき給ふを　案　雲居の

ゆるしそへり　細同

とはつかうまつり給ひにほのきゝ給へるもあるへくてもてなして

をあやしくにつかうまつるに立かへり　案　花ハ内府の夕霧をさ

らひ給ひし時はかなくおはしましにおもきまゝにもゆるし

をとるましきとおもふに女三宮まいらせ給ふをきゝさんらうと也

御子の人物をやことなき中のうん

なとてうけたまはり給ふ御ことのゝちさる所

其のめつらしき御後にてたちまさりなとかくつゝひかるを行すゑとお

をさまりおほえてひとつをえらひ給ひけれハ我御心にもまかせ
きこえさせおほしめすとまことにつくしうしぬへきことなれハこそ
しつめかねうちすくしぬると 花 父帝の御にも女三宮の御うへ嫁
せん内親王ハおほくましきを今ハあはれなる方にはさんかつり
ひとりたちもたにすくもてかくしもてなしさんとやうたかへとひ
まうけなとのことも雲井給女三宮ハそれと也
さすかにはつかし給ひけりまいりて給ひけんとうつくしそやなと
はしるそハ御子のうちおほえ給とも女三宮の御事をおほしめしに
めして 花 女三宮ハかくさまにはしたなきまうけもつかうまつらせ給ふ
いさゝかもとくまゐるゆへ耳にそめ給ふ也
ゆゝしき事なるを又たのもしきとハいふとも 花 さしていとあさ
人々わかれなとの給ふあさきて八条殿の御むすめとも
なんさまあれともたゝ冷泉院の御事にまゐらせ給ふ

すさく院へ宣ふ也たゝ人にハおほろけにハ給ハしとの御心也
後の世にもひとりあらんとおもふかたもあるへき事なれはしのひ給ひ
ともいへるへきとなり 細 後代のうき也
人のうへにてもさるへき人をうしなはんとあるをとふらひしりはて
しつかにとおもひ給ひ 女 今上東宮より院へとの御次の事
ありかたきうき也
かの六条院ふたへおもやさきおほえゆくゆくゆかしきをむかへたまひとる
世の人とかくいはせうらこゝろにもあるかねとおもひしに花の宴のあかぬを
まちきこえさせたまふても 花 源の内大臣のむすめやうあらて女三宮
ハあるへしとまた東宮よりとのなり
またはなるまゝなり 花 院の御こゝろの内にも也
いとよくおほしの給ひきたりとかくのたまふてもやすく
花
院の御心東宮の御つゝきにてうしろやすくおほすなり

まろ此弁してそらいくれたへ侍らん人のさまをも給ける
孟 弁此右中弁ハくはしく源へおんなへを給也
此宮の御事をかく世間しらぬ事ハさとくしも思ふ
を此給へをもしらぬしき御事をもおぼしめされ 孟 源乃
柏女三宮乃事をの給也
さる御事とも院の御世継さくらなりとて 孟 朱雀院御
在世(ザイセ)のころをもくちをしとて源氏の御まもりてハ御
また御心くるしうおぼしてもさる女三乃御しるしにもとひとらう
世とも下此くハしるしとおもんしゆへくるまへしまるみえん
源の御事をの給也
さてあさしいくたちをくれしなでらむ此御しるしころ
のことをハうちとらうとむかへん 細 朱雀院ハ源氏ノ二兄の
あにおはしまし事也

ちにしをひとおやまつるぬあくらかきとりし此ほどものたらんと
思ひまいらせしほどハ大かたにつきくハらる世の中ふなきを
をもつるハ中々さのみあるまじと思ひしにさるに心かへりても又なくそう
こらさてさこそとさなりてんとさくやそうしろうさ
えあゆるをと 孟 老少不定(ラウセウフヂヤウ)なれとも見しらしきもの
ハつゐ給ふとや院ハ四十二源氏ハ三十九也
其後ことにひと不定なる世なりけるめでりやとの給く
孟 かやうにやせさうかくしもてあんの御事にのこりてうし
ろめやさんなりあくされども又このまことにまかりぬせとも
細 御貴くとらへそてかくさくもちなしいかんや不定此
世間なるれなきも 弁 重(カサネ)祠也
またあひなへりしとの生れさまへこさをもちにもつひとるまま
世のうんことを思ひとゆかしに 孟 あんよひとへてよそ人生れ生

まことは世をそむかんの御心ちしてや
うちつゝき世をそむかんとおほすらんしくこゝろみたまへり
をおさなくおはしますにつけても中納言なとは年より
かくろへしきやうすれとゆくすゑたのもしくてへうとも
ゆかしきおほやけの御うしろみともなへきおもひさためおほ
きさきもおほしかんまゝなるとうらうれしくされとはと
くまなたらぬみこのおはしますをあはれなる事
おもひくらしておはすのやうなきあらんおほす
うちつゝき 朱 院はうちつゝき源氏も世をのかれんと
あり 源は二十余歳たちけるとより世の御かたち清らかにおはし也
こゝろは御ほしきまゝ御かたちなるさ 朱 源氏女三宮
のかうこそはたちひきたれ玉はんや
年も御はらもたちさためもあるぬとかくの給へはとお

しくもうち行くまゝに思しくらすうちに御心ちもたゆみ
さ侍るとくちをしく思ひまさるに 朱 院は大かたの御心さしめてたく思ひしも
あはれとしとやに源のかやうに志んしやくしきこえたまへるもちあ
しく思ひくるへくおほして院の一宮のやうなる姫宮のよし
となくのみ年ころや也
さはかりうちかへしなとうつりゆくへくしきりきこえなされし
朱 源氏の宮也
あなうちにかくこそゆくさきのことまても分かれなかりし
しか 朱 宮をあはれにかくおほしめし侍りにけりやうに
御志あんそなき也
人くうちにてそなり給ひぬ 朱 冷泉院の女御にまいる人お
らんとや
思ひとるへきかたかくおほえぬさまにかくらうなれとなり

しまてたまふへきなりあとおしくもてなしたるにてすまゐの人
まうのほりたまふなし　まつの人々　箋　ちかくさふらふ人々も
つかうまつりたまふはうしなへるともまもるは参り給へとて
ともおもひ給ふをわかれしとや　細　まつの人々ゆかしきも
つかふる人とておもひ給ふの御ありさまはなをさしつらぬにて
うちかくる人もさふらはねはなとかなとや
故院の御時よりおほ后の坊のはしめに女御にて　箋　文　桐壺帝(キリツボノミカド)に
ひとつなりともへ上の給ひしや朱雀院の母后の大后は桐壺帝の
春宮坊(ハウダチ)の時よりも参り給ひし女御にて院后(スデニ)にたち給へ
とも参り給へる事なりとさた給ひにて給ひ(カツク)入ら給ふ
きこえたり后にたち給ひしとや　細　先坊(セニバウ)とひき給ひて弘徽殿の
大后は薄雲(ウスクモ)にてうせられ給ひしなりや
ゆきまたれ給ひしとも世のなかをおほしまうけ給ひし入道の

こゝにおほしまさりて給ふ御心さへ　つきまかれ　箋　つかまつるなり
惣后のつきなくもし給ひけれとも
このみこは御子にて女御にてはこの宮の御はしめにはかなく給ひ
けれ　箋　女三宮の母女御ハうちもてくもの給ひけるとや
ことしもさしつきにいとよしなられ給ひし人なりしかと
箋　藤壺女御のうちにはしつきて上らるへきさ人ともてなされ
給ひしとや　細　藤つほにも御まへて八此女三宮の御母の御わさ
ちかうれ藤つほの御さくいそゆかしくおもひ給ひしやされはこれ
此宮をもゆかしくおもひ給ひしとや
いかさにつきあひもこれひめ宮をもちかくれさんおほよそもお
ともしをとるなと　箋　女三宮ハ母なれはくもとも又朱雀院のうちに
てもおもうちさふらへしかんとの源氏のなも
いかてもんとおもひ給へし　箋　源乃女三宮をゆくゆくかうなし給へき也

年ころまで朱雀院のみかと御心ちなやましうおはしましけるにおもく
しまさ給ひ 案 十二月まてなやみ給ふといへり 紫式部はおもくなりておは
くに年ころつねにとりまかりぬとおもほしめして紫宸殿ハ見えしたり
よろつおほくしく思召したちて 案 女三宮の御うしろ見し給
と又御出家の下心さしにおほしたく〳〵しくも見え給ふ御心也
御ものうへとおほしいとゆくさきしく海にさゆくさきおほくあり
もとへるまてのこしくおのゝし〳〵家法をつかしくひたる
河 李部王記云天暦六年十一月廿八日昌子内親王初服袴
主上親結腰給其贈物從御厨子所弁備之朱漆臺四
脚以銀笥盛飯同小盤二脚以銀土器代盛菓子親王家献
爲犀御第一腰云法四巻朱雀院牙庭上男女官饗其侍
臣十余人召弘徽殿南廊給酒肴中宮織給禄云々
昌子内親王は朱雀院の御むすめにてまします朱雀院の御女をも

おもち又法悩の時ならむや云々 おなし后朱雀院ありつるの時法
度をかへても又玄宗の宮なとを柏梁殿あり
久殿なしおなしく 案 柏殿也 花 久殿の西の対を云也云々
异 柏殿朱雀院にあるといふ 細同 弄 柏梁殿は后町のやうなる
ちかう西面はなしの對也
御張台よりはしめて御のあやなしきさまをとゝのへ給ふ
張は 案 張とは戸の口にある屏風なとのたくひ歟や
もろこしの后のきさきを思はしゆるしくたちたまふくし
くらやくもろこしのへさを行へり 案 嵯峨天皇御代
弘仁八年に男女の衣服唐の法を用ゐるといへり
にならへり河海同 花 周礼云王后六服禕衣揄狄闕狄鞠衣
展衣禄衣といへり 長恨歌傳云又命戴歩揺垂金璫
明年冊為貴妃半后服用云々 細同之

こしゆひあそんおほきさきおとゝをとりたまふよしきこえさせ給へり
かれはまとしくあるまし人なれは　栄　内府秋好也
河　太后御記云承平三年八月廿七日女官裳をきする戌
一品御裳のこしおとゝゆひたまひ給ふ
花　李部王記云承平三年八月廿七日康子内親王着裳於
こしゆひ給ふ一条左大臣の御むすめ也
秋好中宮御こしゆひにおはしましけれとかんのきみにもとめられしかれはこゝろもさま
中納言のはまうしける　まうし給て　栄　内府へやうらまし
こさんとゆう
いはまほしき大臣たちの此おとゝの上達部なとみなまいりて給ひさ
りけるとおほせらるゝにとこれをあらはしたまふてなり給ふ
いはまほしきの大臣　栄　左大臣也大臣なる也　細　同　此　旅かと
なし

みこたち八人殿上人はさらにもいはす内裏春宮此かたに
まゐりたまひあまりていはかはらぬのよきさまなり
栄　こゝに参るへき式部卿の宮を始めとして上達部殿上人
なれへし
院のおほきひとゝもちゐたまひてもみなとまゝに
なりて心さるしきかきたまひて　栄　朱雀院の法皇
へさかのは見まてそ也
殿上人におさためてかるへきなきなとまことにおはしますせちへ
院よりもはらかしひいらせたまへ　栄　殿上人の納殿の
御物をおさむる所なるへし　弁　内裏女三宮
時内蔵寮の沙汰よりものするに殿上人の物とかさねて
や地下の者の作所にいためる一勘云殿上人のそうとの出も
殿上人まつて調度あつかるところによるとそあり

私云 かくり日本のてうけいにもおさめらるゝ所なるべし
さる上抱へとも人くはらく花鳥の大臣の法ゆるさみてまのな
と 箋 法として用ひの大臣ゆるすなり 法慈恵乃ちしゆひと號
慈恵と号とるは不勘之 花 是ハ大饗乃所をとめらく
法りさのかしゆひを号するといふりはなりて唐録母ま
徳爵歯乃三乃中に一もあきらぬ号するとなるなり 弄同
私云 歯とは年の事也 爵八官位 歯ハよはひいふなりさまと
尤年老人をそ不用之
六乃院よりもそてなましせ給ふる 箋 六条院よりなまう給ふ也
中宮よりもせさうそくゝしのちこんとにてうせさせ給て
かれむりの見くしあきのをゆへおるゆきしにおもくためらくへ
てさいはくにもとのんかへをもうしなりはそれとみんをそてその日
のかつくるさなまれさせ給 箋 秋好中宮の斎縗ぬをたち給ひ

伊勢へ下向の時乃具也 花 法りをもさみさまの髪上乃儀
式おまきに櫛のもとをいらるゝなりと云 弄 秋好中宮よりまと
朱雀院の女三宮へ条るせらるゝなり 昔乃みくしおまきれく
とりそろへたる物まやかに一動 秋好中宮は斎宮立給
し時用られしくしあまれくなるべし 裳着のあまより
髪上ありなる同 細 東宮より立ち給ひし時のるなり
宮乃猶のもゆを院の度より二をはつりて妣をは法使あとく
箋 中宮の大臣とくふ數也 院乃度より二もは中宮とのとくふを
て宮法らへたるなり 細 中宮乃猶の裳着也 箋 女三宮への法
妣宮乃法らさに条らくへくの給ふをつれと
使おりらく院のゆくへ乃法せうらへたるなり
かくの事とそ中にも給ける 細
朱雀院へ条るなり 箋 妣宮の法々へされれとも元るき
院へみんをかけらへさうすとも

内しあるらう若き今にてふれは玉乃小櫛そ神さひけりある
中宮の御方さしあるらくはされたしのんもらくしはさもなる
まうて櫛乃えんもむかし杜若中宮伊勢へ清下れ時大
極殿にて御清さらしたまひし後にて又女三宮へ
清さへ御へをまつりたるらしとみなるとのんもと神さ
ひたりとかくさ給へり上久　花清し又かくる乃ありし御
んあり櫛をとはこそかほさきす物なれはさしあるらくとらて給
てり後拾遺されたまふ玉の小櫛をさしてあるらく文へてる哀
むすひしこそとは浅さしあるらくはさ給とうやや又さあるらく
とふことともみも用るも拾遺三り大宮にむまてさうさうの
内しあるらく云てこのありとあるかの神又さしあるらく人乃
んそとらく殿の御浦乃清殿ゆふうくへるるかく世見はさ給ら
みうてとそにうまつりてれさしあるらくむかしととにつき

かれとこの云に二乃心まて殿迄とるも　細　内しあるらくはされから
あるう櫛まえん有てあるしそれまくに衛侍したる
ともに神さひあけるやは久しこさも御きの人も　昇されから
あるうくにしきたり神さひてあるそ久しこさもひき
乃人あるき
清清しんしつまて哀りお用しかそしるてるもとるもあり
けるき　宗いあし東宮乃時大極殿あるく院の清んをとそひお
路とも
あへ物らしうも何らしゆつるやる路へつる時ときに物のさし
きうんさしあれたし　宗　あやめるき物も杜若の葉とうへり中宮
りあやうら路へとゆつり路へまえきに面目らしきう
むさしとの院乃清んも若れ哀とそさしとくやは大極
殿のらけを云う　細　あやうり物とも杜若中宮はさんある

人やすれたるや
たゞおこなひを心しけるよし此義をもてなしきこえて　細　大極殿にての
ことやよき日を撰（シウケン）ぶのことかなや
なしつきたまへる御ゆるしの方世におほき此ことし乃神さぶ所まて
宋　朱雀院はなちしかば中宮の御年始のまゐりのさしつき
すりひめ宮にもとまへる御めもりたゝみけうの文字は猶
ひかれぬへしつきのあとし此家々にかよふあるかてと
いへるひめ宮にはたんたうへし　弄　中宮に女三宮をと思ふに
又もさ（トツテ）物めとかれ乃御字やの文字清濁（セイダク）あり一勘合点（カツテン）こと
まそいつらひは乃し紙つる清心もちつとかくかき紙そんしつ
ねひしおこしめこの法いふにさて三日まてくしてはへ
あらはおほしをはしる　宋　浅の法りまては中此事也
よろしきことのへのうへめてことにてさて色々あそたてう

あしきめりけさるれぬゝまして　いとまなり
うちしる給ひへ　細　中宮の人さへとや
法ることにしも御はしまそる　宋　女御文義たちぬくをとりつ
内侍のかみ乃ことは法とかくひかて心さしくおほしへ
ふる給ふとし人の給ふく　清と　河　集　日本紀
あるとやふ声は源氏けるをかくとひしく給へる御此宮へるく
とあるられとて法のりてをめへ玉れとあるかもたにおもきう
をくにうる給ふく　宋　勝月の法の法かしおもう給をも
なあそことなく給へは院にしくもへいつ給へる心をこかゐらへ
称（カン）欲此ときわりけりの玉給ちんとこひ給とや
山の座主とるたつゝめて法のむる此あさつくへはかなくみて
はうかくるとなまるやとひ宮をも給法さくてうかへてくう近
そのせみえひをまうしたる便くちうをゆゑにあるよさとえ

とゞめ給ひて・て女房たち女御更衣の御かた〳〵女を
しとゆきもちてなれともむかしのいと御あそひ〳〵
法のむしとのおさまし三人　栄　戒の師にたのみや受戒（ジユカイ）や
細　授戒乃阿闍梨（アジヤリ）や
うちて行ひやうに法師やうてあまたの人をさけり
みいらうひくわかりしめさうくも　うちてたひやうなる尓
栄　仁和寺の御むやなして八すこ給ひぬ尓おれと姫宮の
御付給ひん間のこのやし
思ひたりひく　れ　まつもりし法まくありしまたをこゝや
さくけおさむれ宮りひゝさまくやおほしの給ひたち
あるとえしめちりて法とおしひのしあさいと法しや六条院
をもくうし法四ちらうしくや出家しくや給ひくまり給
御さまれ文　細　女三宮也

法たりえり此ぬ給ふとてそこれおほすことわりとみの法の
とひとしをはしまりけ　と　栄　源氏太上天皇に准給
ふ時の法に随身（ズイジン）をたまはりの法の法の封国なりや
またとの太上天皇此儀式あそうきり給ふ法のまて法
ひゆゑにあるさ法給ふとハんことなれと　栄　ありなの人りと
の太上天皇のやうなは源うきもりてことくしくさを
給ひぬさ法とや　弁　冷泉六条院乃なり也院号（カウ）ありて
せ給なあと太上天皇の儀式なりかやうかの一勤封戸（フコ）
年官（ネンクワン）年爵（ネンシヤク）なとハ太上天皇に類（カハル）如なきれとも天
子みてましくし凡へ年此脱履（タツリ）の後のきしきみなまき
かるへき〳〵のや是又勿論（モチロン）也官法封戸乃尸といへるハ尓
とのうちや一勤戸は民戸（ミンコ）や其の戸百戸といふハ民戸を
うちくるんや其主を封戸といふ也云々　細　源の事也

なるすなうち捨給ふや
なかにそこ給へ　栄　ときさしにつゝやかし給ふや
まんのちとくしうねはゝ車あかうむたちあるとはうへき
うさ也　栄　右大臣はは車ハちとくしうへきにはほの
檳榔車にのり給ふとや　唐庇るとの車ハ後ヌ出来ゆ
とハり　弁同　細　つの檳榔毛乃車あるへし新されれ
車ともし中右より出来ぬるまのや
くる夜あてそはつふまつる流みえかはしくまちかろう心
えらきあ給ふくる人しきこはうちちと申ほつかうてあらん
えいめんあうか給りてきはさちるきたちかうしはし
りれすしうそひろかへくいまとまうまり給るするさ給へる流きと
さ康乃んまう給にさしうこゆくされふれあうれく
栄　右大臣すまう給くの供奉ハはしめそうるゆへに

車にのり給ふなり
とあうさくおほさるは　栄　源乃はちるこれうるや
そこあるとこうあらひ給ふは　栄　久しくそあゝ給ふや
右流うとられまうしうろうひまるまのつはさまくと給へ
ら給ろうも　栄　源の納言の中にはしあとれまうんとんれのそ
こ高くほりしとろくたくのつくうれてそうきひと
六百すつあに院まとくまきるまうんぬるさときつゝく
六ひ給すや
このうえ代ほいふくもくこ給あるとんやうくいつ給へたくま
ぬらうのこはつくはあにかくさんまりてうあくそいとくれなう
まほ給ぬるんのぬるさをとうへくゝてかうあるらされ
細　出家のへくさしうるや
あにとうるそてハうことにあるまうくいつ給へたち侍あうゝく

背をそむくにいとゞおぼつかなくさまことにて
給ふれと　源の世をそむき給ひける程にても猶
心ひとつにおもひかゝりてことさらに西方に給ひし
なくさめかたくおほしける也　宗　源の心をもやるかたなきと
のたまふ也
院をおもひ給ふくおぼさるゝにたへぬやうなれはうちきこゆれ給
ひとつ心あへ今はのこゝろといふもかきたるにをきたる給
事也　宗　朱雀院の御さまをいふ也
きこゆる御心をおほし給ふ　宗　院の御世ひさしくあらし
とや　細　院の御なけき　河　我世をもたもつあたりとま
つりひとのおもへれいれたるといふまでなるきみ　秘忠集　人のよ
れわひをすてゝおもふやまのうらはかなくもおもひなけける
給へまし　新　雲山のうれしさあるといふ　弄　院の御こと

ちゝや命ながらふとのたまふ
さはかりに行ひあるをもうちすてゝかくれ給へるのちもしめて
もとよりは給ふらんるをもとひわすしてかんかくてとのこゝろ
かうそひおもくは　宗　院の御命ながらへかたくおほしめすれを
さきそうたはとかれは又隠遁のこゝろをはゆるさんすれとも
又さらひとくちをなさことをとゞめきさんとかくやわかひお
こしてとや又かやうにくちのこゝろもれは命ながくはおほさる
ひかうきこしとみ給ふらんかれなかくくるしさそあやうる
はちゝろのこゝろに念仏をとくたとさひ給ふとやらしとを
うくらしの心也
わくらひの世さしとうきわましかれとまつりあひてとのこ
めさせて念仏をとくたとさひ給る　細　とゝゐあはされかさし
をし給へきは気力もとなるとや

ちかくしらぬ身なてをせりあつめぬるちとたくさんさし
まうさいあつめ給ふるやうの給へさしまいぬあしをはらぬ
をとこまてはとあるそれとらうとをさたにゆきもうけはまん
とて　ちかくしらぬ身なくを　宗　今まて存命する
うとくと出家させ申さんとあれは存命ぞとおもひし
めしけるとや　細　かく念誦なとしまいらせゆふに
うきさらしむるとや　出家させし　弁　此出家成ける也
柏木ゆへとさきてたちさ御ちとくうしくの給へはるつねてに
女みこたちをはなれうちそそて給ふあんなるしき中
あるを　宗　まんくはなくこそれるなや
又おほひゆかる人なれどもとかくしるめくうん
思ひ給ふとて　宗　女三宮の給ふなるや
まかせあへおもしぬ給ふしきを　宗　女三宮は給ふなとなし

くにかうちむかて給をぬ御のめしおもふなり
心ろうしく見まいり給　宗　源の心也
源氏のうちあさし　細　源の心中也
さ給すくにゆくしさ給ふさ御ちなれは御けしきまいらしかくなか
宗　女三宮の御事を源氏もちとゆるしく給ひしあまなん也
おくにおもひよるもとを人をちかはうくら給ふれ給ふし
ろうちなれはことわりもなきつくさにもちん給ける　宗　源の御心
ん女三宮は年人あて御まゝしれ給ふなれともちまれ
もとのなり
春宮はかくておほしまうをはいとうしてなるゝの世はありぬを
のもてとはあはれなるとこの世のこと給ひあるさ世のしきすること
宗　紫のきみの給ふなと後代の人しるへきとのなり
まうしてこの御みせ世をもとうまおもひんことを一かくしてある

そなたにうち申給ふへきよりは給しぬはなしかゆくさきのことはは
しるやうにへいさにたとも給ひし給と　宗　女三宮は源氏をもと給ふを
うち遣て一事あるにも思ひしめ侍りしとや
あなたにもくさきあるまへ紫の上をとあり君はまつりみと
源氏のりきうたへしやなんのひとつかふ　宗　春宮は源氏に仕へりつる
世給ひくをまう下をまうひ給ひうんをもたちらんなれも
さりひるも女三宮あるにはかなきうやと源氏心ゆきへ
ゑうましきとや
女乃御たあにあるにちよる源氏まさやう給ひ給ひへんうをまへきに
を給ふさまと思り　細　給ふをも春宮乃御心のまつくあらまを
進と女乃三をあると女もの御心のまつくはうるたるを
給ふへし也
をへあ女の御たあるにも宣ひしまゝと源氏もうつくとを

さまのへあるときるへきもちにちらうをとうちうしこきのしぬ
るたにてくくと雪ゆう清ものやとめ給ふあれうしろやをそる
思ひさるかに給ふと　宗　さ陵くき宸のうしろろんとひさんは
侍るへきさすもれちきをとをや又は遣は先姫乃のやうえさ
らぬるのにてくかくと雪ゆるをも御姫あつて御さりう
うたるやとえひくそくてやまうしきとやそれしそは
ままうぬえんゆをもいうしろへとや陵の其れ給ふうひ
給ひそよくにく給ひしろをとえくあ給ひく其るへきに
あつうをもにさめ給へとの給ふや
あをむかく陵其れ給ふうひのうるへくらうしきにお
りしろくまく思ひくきるへき御あつうをもにあとうて
給へさにちうんたるあるとそまし給ふ　細　あるへき給ふしる
と宣ひ給ふくよう給へしとや

さやうにてひとつになりゆかむ御進退も　朱院の御詞也　細院の御心のうちをいふ也
そむき給ひなんとおもほしたる所あり　朱ありくるましきことゝ也
かゝる人のうへにはあしくもおもひ給はさりしを心よせおほしたりしかとみえ
みなし人をしへてうけ給はらんことをしるへき人のあるやうにひかり
うしろめたく　朱勝識天皇の女宮をおほしめしたらんもてなし給ふかとに内親王と
えらひをくはやうをやさしくおもひて定むへき也
女三宮を准するなり　細同之
まして世のことはり比せをおもふへきにもあらて　細院の御ことか
して御ゆかりむつましくおもふにさるへきはしたなく今の世
しなかれたる人のうへに思ひよるへきとや
あとなしくもてなさんはしるへきこともあらぬをくちをしくおほす中のさたをも
さうなき御有様くにしてひとつにつかうまつりしなりさためたる人のうへを
ひとつ物にせよとゆく　朱女にさうなくおもひつゝそあはれとおもひけん

乃上御ことからめつらしきにてまきれ給ふなりきよけなるへきほとの
これをもてあそはれ給ふまてなんあはれとおほしめしくにゝひとつ
らひ給ふとや
ゝむ世はとこのむねをわすれぬ月日ものにゆきもしなしたまへ
にくゝなん　古延久の御時めしおかれね六年はかりとほとおはしける
うへをおもくしはへり那
かうしたるにゆつりまいれと　朱源氏のゆかりの給ふさんとのはんなり
せつかひはせて内親王　弁云女宮を親王宣下ありく号
をかへや一勘合時
ひとりもとちらみえてものかくし給ひしてかならすすゝめてはなとの給ふ
めのうへもしかさなりてのちとひとりまかりてきこえ給ふと持中
御しつらひのひとりのすくなきものなりとて　朱女三宮を源の御乳母
みやつかさをはなく後見給ふへきよろしくはからひとゝのへてひとつ

おつる涙へとや
もとゝるへくこそ侍るなれ　宗　夕霧ハ御子にもあらねハさゆや
く給ふなとしるへきを内證ハしらせたまはぬ御子の給
たまふことゝや
御方かへりてきこしめしけれハ給ふ御心ハ給ふと宗の給
ふ　宗　内證ハ太政大臣なれと知らせ給はねハよそにや
る事なれ御方にハまうらきこえありてよし思ひ見るを
中納言の給にも知るものやうれるかさハいとゝく侍りまする
給ふと　宗　源の返答也
あはれしとまて候くら宮さるも侍るなくてそ候らめ
宗　夕霧ハ未年もかく御ふさうしとのこと也
くさもあそとこの給へん御くらいのゆのさき給へん
御うらに侍りそてハ御ゆるされも　宗　源の深意に

きこしめさんよ院もかゝる御事とハ女三宮と御はさ
給ふとや　細　源乃我か身ハかくなりしを宮へこそ
今くゆくされのかなしくて侍るまつるもるゝやゆかんと
うらうみきりのこゝろん心かるしく侍る人へこそや
宗　源殺命ありて女三宮へをさなきをさめさせ給へとこそや
細　侍るもあさまさりよりしるしへまつりしとされと我か
乃ゆくもとゝもかうかるへきとやらこそや
うき身をきかはの川　宗　源の後堂にはむとや
板より今ましハあるまれ候そこまうりてそのときにあたらへみる
御まへみて　宗　源乃使まやまされ御の退散や
侍るまかれの御をし物あくうもとつかうてあき見ゆらしく
せさせ給へり　宗　院の法皇宮殿なれとうかまきと清精をかや
侍るしとハ嫉のこゝろや譬同じく

院の御まへ[illegible]
[illegible]朱雀院の[illegible]
[illegible]院也
[illegible]
御持仏ハ[illegible]然盤六[illegible]有[illegible]
維摩之[illegible]
[illegible]家の[illegible]也[illegible]正月三日朝覲
のため延喜御門[illegible]仁和寺へ行幸有[illegible]靴を撤せ
[illegible]又年三拝[illegible]
[illegible]
左僧[illegible]朱雀院法[illegible]
家の後[illegible]寛平法皇の
[illegible]

[illegible]靴とハ[illegible]
[illegible]撤せ[illegible]
とぞ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]大納言[illegible]雪に
[illegible]
この宮乃[illegible]
宗 女三宮の[illegible]
六条院ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

心ときめき給やうに世にもうつろひ侍ることもさやうに
もなきれハ女三宮の侍るもろもろのことく心はんとゝのほ
上の心也　細　紫上の心也　槿の斎院をもねんころなれし
給へともとうちすてゝあるまハあるれやうの事をもひするへし
とおほし給也
侍るをやあるときもとかく思す給はゝ　栄　源あはれにそひきされ
ぬとや
あはれにもなくあはれに思ふにつけて　細　紫上おもひ也
出すまといふ世間さん我心を親もくるましく侍るとも何
らんまつまて　栄　源の心也ともまてハ何心もなくてあそ
われともきこえ給くハ紫乃さえそこうひ給へんとの心
あるへし
中くいことなるさまそてまてさそしめ

花鳥
我子にもしいとくおさくや此物かん野中の侍はひろとまてされハ
見えさせ給ハ侍しも侍と心にもひうひ給かんると面を
くりもお侍さる　細　見ことりの侍を見るさしめ給へつきさも
くやうのすれ出来ぬるにつきてた一人たハせ給めもすへきと也
いまのうし法と分りて世ましてくるにてそして世のし給す
あなた氏の侍中なれた　たりし心はなるそのうしく乎源と
あらんといつもをさ紙　栄　源の浮年もちやるまを給へハいふく
紫上をもさりもにやくこんなくさひ給はんの気そして有
てきいつきをとるすとや　細　此年ともあらてハ秋のまつもる
ことなや
まつ秋はうちもとさてあり給い又乃日雪うちつもりたる乃
きしきもも物何の事へにあれあしゆさくされの侍物給ゆ文
ゑんりし給・若　朱雀院よりとくゑり給し秋也　細同

院のうちにもまれくなり給ふなる時もなくひよ余りて哀
なるにとくもの有つるか那女三の宮に御ことをいとほしくて
きに相見しか　答　院の御出家なりしよりそ　細　源の詞
ありくるんの給ふをつましうおもひかくるはしなくて二　答　源へ
女三宮おつきやはらかに事なるへし
えゆゑいふるひとをなりけりしと　答　まとまりえやへやまさ
ぬとの詞や
おとしくそへんきにひあさんかし　答　女三乃宮にたいへて
さるさおつらんとや
とはきやかれたるをうねくしくさまをまうしくそひおりとは
されはへ院くにうしきそまのを給ひしみたてとくのうちへいまのく
しをさへめ乃つるてい他つへきさ海たるかおとくもとの給
てくしみえ　答　源の御年ともえきを給へく第する　とすて

給ひくうねくしきとのうすや
えさもなくしくもくへきひやきてなんなりと御山もしにいて
ろひ給ふんほとあつそへ　答　さみさそえつやとことやさぬとの詞也
見らしなましめ　答　院乃山寺まにいてまを給ひんれあしに女三
宮と六条院へわたしやさせんとや
おちさなすくやおほさるへきならしまさるあるとも
答　紫上乃ふかと源の給へり
はさめある心にかなふ時にはちしくはなまし　ここなとへ〳〵まさりあ給
そよ　答　紫上ひ女三宮に御和なりとも紫上の御うちとあり
つきかもめえるをはあそくもうさま給はるあとや
彼御たあつそへろうしからめ　答　女三宮にこそ紫上のむ本意
なれそんへくるしかんとや
それもうこくなさまてあるしきん雅もてのとうはれくそ

ろく給へるとおぼし給　哢　そもまことゝもかくもおぼしさく
ちすくまてちすべく給ふるとやうれしくかたくかたらふく
心のとくにもなくし給へとや
あはれなる事もこまひとゝせとのにあそびましてものゝおぼし
て心中をうらぬ院の内さ女あてされはいかゝおぼさんとおぼしめし
哢　源のうりそめ此思ひありさまをさへおもはしけなく給ふ女紫上の
きこえまして女三宮をとえさせてとや　弄　源氏の御むすめ
心乃事　細　紫上ハ色様をてすかすくとて嫉妬(シツト)の
くるしかりぬ人とや
いと清きなくて　哢　女三宮乃方を一向(カウ)に紫上にしらり
かの事給ひさるまてなしくるとゆり　細　ことに
出し給ふるとや
いと哀なる院の御心にかなへるかな　哢　紫上の詞也　細同

あくまでいはれたる心ぞそくさきまでも人さまにて　哢　紫上ハかくて
うへ我をくへこそとや
めざましくかくハあるまじきとさま思ひまじくハ心中よく
て侍りなんを　哢　紫上をも何とてやうかゝてあるそれに
とく女三宮をうつめ給ひ院の御心中もなくて我ハ侍らんと
のん也　細　紫上乃このましからぬあるべきと思ひてもなきと
なめもてなさん也
院の母女御乃御かたさへかくにとうらうらみかすまへて
世やと思ふし給を　哢　女三宮の母女御ハ式部卿宮の
いもうとやされ紫上の御はゝかたの女三宮をいと
こなたへしるましくとも女三宮を我ともし一の
ともあへかと思まし給ん也　花　藤壺の女御ハ式部
卿の宮の院の御いもうと紫の院のかたの御母(ハヽ)也　細　紫上の姑也され

も他人めてゝいふれとや
はまるさにうつりもき給はゆるしとしられましやうし
ろめくこそあはまさと云ふさに思ひしゆるしてうはせ
も人もかゝ給ふ御ゆるしくにすてなしもてくし侍りく
宗 源の御やはまりなやうにところまてのゆるしもとくろせ
て心はとるれとのかや
いよくはそれりるすんきつくとかのなるとせん人かうと
まくつま給ふをつく世れ人かくちやうに納すんたうひ
そるとくあるく 宗 まんしいさやうに紫上のおほさへ
なとくこゝろんはるまりしこととや
とのつく人かあくゝひるとうち明くゆうとおすかは
るるすやてうる納なあるを 宗 方曲（ホウユカニ）もく男となるれんや
細 人のあるすとたとやうり河海り孟子（マウシ）とひたり

河 人のあるをとへことさへなる事をは悪人の中へともてこそくへなる
心ひとつにおさめてありさ度りなくふすんるにれ 細 よるく
塩梅（エンリヨ）とめくらしたるしとや
まつことにさしりれくあいなきふまのうらくし給なるといとよ
くよくへ思ひ給 宗 紫上は猜疑（サイリヨ）は物うくくし給ふなとや
らいつちあと見ゆくつよきといてさこにさるやうたなるなりみゆく
のうまう給ふうとなきさ給ふてきにも思ひしなきし 宗 紫上
のんやまうらみてさうろやうなるやうに世語（セゴ）りまうら
あつたるなるとくはよまいふんやいつにの給ひくさるを
のうまうゝれあすれハ男くもとなるまうきの行ひくゝつと
紫上此ならしあさ給ふんや 弁 紫上の心中 細同
我はまくろるを給ひつきむるまにさしさうひ侍つさき
宗 源の心さめにさしうひ給りん紫上のかや 細 つきめるなるとも

もろ人きこえすめやしくはかなしとや
とのゝちろくゐなるをわすれぬるあはれさゆへとはしるしもせぬる人
きゝてあれ柏かきことはしくなきひかしをはなるへく侍るか
せんかたなきものゝなし　箋　是は源と女三宮とかひかりしてか柏
をはらすへうらみ給へるかれとも院よりもこまやのことおほし
めされたる紫上の心をはゝかるへきなるへしをとや我ゆきす
をとこひ心をはなるへきをおもふかなをもむねとをもを
いくせのこと也
式部卿宮の大北の方
はゝうへなりとをしまるほとゝしもなきの給へそはく　箋　紫上のまゝ母也
箋　北ミコ兄也とものろふんや
あちさきにある大殿の侍るおりはやかしくとこそ
給ふあるさまをやうにはなれてかへにいちきたるかく思あつかひも給ふらん

あると　箋　是は式部卿宮の北の方へまつり給をは紫上の北ゝとゆを
またはかりにのゝ給ひかくしも給ふとやともひあるへきを
給ふんと大小きれたる殿の北方をいとまちてのまゐる
よしおもひ給へし女三宮これにかゝり給つたれはこそれゝく
へうとの給ひんたるを公念するとあるいや式部卿北方の給へ也ん
らまて給ふは紫上へはゆかくたり給はねるすや
おもひられぬる人の侍んとかくと　細　いかなる人のゆへなかくを
うらみかねつれはむかひはおほすとや華子の沈や　孟　紫上の
いそくるをれくきはあかくしらん　箋　大かたなる紫の心やをも
いふとのやう也のあれ大いさゝか心もゆかるとや
とはかりとしやのことわりもとおもひはゝかりてもちやくてしまくし
あるせれんかにへろかるゝおきてにをひつゝ給へつい
とおほしたゝのさまてもし給へり　箋　紫上の心を柏木

此世の御ありさまとあるをハ何とも世をいひあらはし給
ふに女三宮はかゝる給ひて世の人のいかにおもはんと思ふへきを
大将はいまたおさなしと也　其人かなしくなほしんと思ふへき
ところ也　そのさいはひにまかせておはするを　うけられ給ふも
年ころかくぬ朱雀院あまた姫君の中にも此宮をおもひ給ひしも
けしき給ひし給ふ　眞　源四千葉也　花細抄同
世のくちをしくいとうちわらひくおほえなけれく
眞
女三宮のかくてまかするとも給ふへし六条院の宮を
給ふと口おしくおほえけると給ふ也　兵部卿宮　柏木　衛門督大納
言なとあまた
うちあるも世の人あるとて世の給ひけるほとにかゝるはおほき
めてたきめしておほしまうすに御事　眞　世のかゝるを
此人女三宮の御かたなとの給へとも六条院の御心なれと

きこしめして心くるしく給ひけんへし
きみハさしハよもちにあり給ふれハ清かんのすむ御おほえ
ありしこしめしもとくさしも世中此いとあるよしくるかくてこそ
みくゝをさとのミてゐおほしくゝきこしきこゆれハもしりうる
この三給ふを清ん御なく　河　照宣公四千か葉古今集ニ
貞観十四年也貞康親王四千葉同前此外見付る
細
源四千葉也
みなくさひか給ふ　眞　源の清蔭のむすめ也　細　儀　論語
正月廿三日子の日なるに左大将の北の方若菜まゐり給ふて
まいらせもまし行てて　眞　賀の御日也正月はねの日なり
例多き御きこえける左大将の北の方の源の清蔭のむすめなと
それかて世に新給ふ也　河　十二種なそれ　薊　薺　芹　蕨
薺　蘩　蓮　水蓼　水葱　蓮　菘　此中なるはさ

侍し此説あり白河院の御時に献したる人の日記なとに
ありしと見え給ひける大外記師遠は大臣の中にも
ある旧説を用ひ申けるよし旧記に曰七種薺蘩
蔞芹菁御形須々代仏座四十なるをそへしめて
数の三つるをかさぬるや書の物わりるをはさてられしとた
ようとあて候也ともあれ仁和のみかとへに奉られ給ひ
ある説あり是も賀を行ある事也 花 延長二年
正月廿五日甲子天子四十御賀父上皇被献之於紫宸
殿有其儀采女調和若菜羹一坏供之云々今案延長二年
の賀ハ醍醐の御賀也宇多のみかとのされともんせる
此物語ハ然賢思の大相の室六条院ハ賀をまる父子の
事ハあひられるとかへともこれに正月此子日也四十賀
賀也見られてうもせるとしてうる侍るし此物語

のはへりき源氏ハ此院にての也 弄 正月の賀ハねのひなる日
をもちゆる也廿三日子日なる間御賀なれハありける
いとよく其のひとも御はしまりもてなしまいらせたまふにてこそ
さあるへし也と行りん 栄 源の斟酌し給ふゆへに玉鬘のさ
しまれうくしゆさまて用ゐし給ふ也
思ひよれとさえる此院のすゑかひあるれハ 弄 玉鬘ハ父とは
も徳ありぬへきん也
ことを行ハしきにもとりことなり 栄 玉鬘ハ源へ法
此乃さ侍きとくしきひきさ也
南のおとゝ此西のたいにてにわたりたまふ 花 六条院の南ハ
おとゝの居ハ対のおもてそのうへのみさ比ニ北し
わたりぬ 弄 玉鬘ハ見られまうけるかも花あるに西の対ハ
やあるへしとて東の放出とあるハ東対乃母屋とうく六条

院の内南乃庭此言葉のまれちひて去をまやあり

細 六条院の母屋や

屏風乃名ハ諸をさらしめておもくしと見えつしかれさ

里 栄 墻乃代りにする物とぞ云り 釼代又防様去屏風と

集乃ことをもうきにも此案又此屏風とあるをくへ志ろハまつ

此やうに係るとをうるや 和 白き緞をとうるひしのやう

あるくかくる物や

うるりくるしるるとを云ふに 栄 つもとのるや 河 此を屏上二

条院母屋くる此案又四ありも侍るをとるてたりとかんくにうるハ

略しるもり義也 細 りしるるとハ在ひ略かのゆへにつやくはるや

わくに在上ハし略にもと侍るへる也

流ちしるを四千まへハ 栄 地敷也 唐菴せんのうへひや四千枚と云四

十枚をと義して古ひ出とや 河 地敷のるり流記云 延喜十六年 浄蔵

当浄庵南廂鋪地敷二枚其上鋪四幅帛一條舞踏所云々

花 地敷ハ唐菴又ハ大文高麗なり縁さる物也あるひハ綺纈ノ

縁纈貴のちりさとい家あり纏乃なるひ也へし 細 唐菴をるも

云 唐菴り大文の高麗ついをするひとへあるなり文

浄もとね 河 茵

つきをさしあるおや

きうるくるもとをつるへのうたくとそもむかしたゝきものあへ

河 脇息 同 挟息 延喜浄記立蒔絵大床子三脚其上立沈香脚

息ハうそ

浄衣そうとよりものるくるそ 栄 四季ときるそへつまってみる四

寿そんの渋はうそをうるへり 栄 螺蛔ハきうせたるとうしや

十氷案たるゆへ四あり衣そとハ四季の衣をもとつり

夏衣の流ろうそく 栄 夏衣ハ夏を此中にたもるも也

かくこくもなれてこれもてもゆするつきうくもののちこもあとやう
の物うちつくさうるをはなし侍り　栄　香壺(カウコ)薬箱(クスリハコ)なとを入(ニユ)ハ壺の
命(ミヤウ)乃名をあらわれし薬用ゐるもゆるはさといふもんさくらの
類(ルイ)もうをむれてこむかくてゆふかうそれは乃物とそいるく
第やうちくさる事と同
注ちさしのたいあまもちんをてらんとはくなる　栄　侍くり花をして
高りもとゆるやこれを花をとうさしても花をとうくはんや
細　生花を高まけして花をとうくはへき表(ヘウ)具(カク)也
あつしさあやめをはなし　河　一切の飾り紋(モン)のあるとをハはやあと
いろやうく完家の飾やあとをまれつきあるとわるやあや
もとれるをくとこや
ねるをきよいをもとこうひあすしたるんうへあり　栄　くきし
乃花れ今乃ろやはんそうしたるていや

つまあらしくらむ乃花物のこやひかくくうとめるを結つる人あまく
めさのまをぬさ海よまとるよし侍つり　栄　むかしのをもやこやひともを
情(キヤケイ)をとりくはくるや　閑扉(ミヤヒ)　風姿(同)　伊勢物語
たへるのるすをいふをと侍ししにとりしりく成稲本なると　栄　一畝(コン)な
と香ある色を侍ると海くて色をとるもとをいほんそうし侍とや
人くくあまりあるとし侍さくおもしに出路とそてらんの美に侍るく
めんありけんのうちあそいあし色お根しいつるとともさ海く
あるきんうしいとわくくるくあまくかく侍舞へるとといふすを
栄　とのく果の路根とにおもしろき海の外へ源出すさを
路をとてまいりむかしくにけるといめんや
むつかしへあやとお根ゆるさ海の名さあくしく　栄　源の侍さ海
わくさうくにましさせて甲斐とよをひくことにうさる色
さるをとや我かくれんや

人のおやきこえしおりしもいとめつらしくて年月をへてさえ
なりけるハいとうつくしけれとかうのとなきやうなれはるかへてこそ
ゐてかの内侍のかうの殿 孟 源氏の人のおやなるをかうたく
くわしくおほしきこゆとも
わさわさしきもいとうつくしうて物したまふ 細 むかしのゆうこ
ちやうちも 孟 のちの左衛門督右大弁といふ人也 河海の御説
時三四才の人也
若の君ハうちうちにてもいとけんせうにもしとの給ひけるを
孟 むかしハ内侍の二人ありし源氏の君を思しきこえんといふと
の御へともたわのうしろやうのはいそにとて二人ありし君
でおもしろき事也 細 むかしハ此母の時のゆかりを源氏
こまやかにしなさしめたる也
たわうれはいてうちなかしんせきをんとてあつかるをあす

やうにおもひきこえの河海の花鳥にもしもくこともありくあらし
を 花 蛍兵部卿の内侍の二人のうちに左衛門督右大弁といふ事と
河海云木柱の同胞男女といへり河やうきはまうされむつ
ましまうきいふるも中ハむかしの弟よ兄弟とみゆる
をのふ松をわけてもとりまはりて位時三四才也それうち
やありけることいふ 弄同之 細 花鳥の説可然
弄 むかしのこと也三四才なるへき也をかし
もしるよりひともしつし此母はとにかくにもめてあるまじき
かしこまりしかれわかくしきを海あかくわたるものとなる
こゝをと 細 源の朝 孟 もとのはしめひともおほしてたゝむかし此やう
まわりしなさすなむかしの時こゝもとを見給ふまにかき
まてゝしきれきこえるも
かたをさへ くれまかりてまるんなるまことたるなれまてとひ

しつるゝおもゝちも給ける　細　宰相をほめたる也
中納言これにつけてもまいりたるかたはらいたくおもひつゝそ
まつらんとおもひけり　細　雲井の雁の腹也　孟　夕霧は宰相をとゞめ
たる源氏をやさしきまねにおもふ心のうちゆかしきと給ふ
てこそよまれぬることにや
人よりもさとにうるはしくしつらひ給へる宮のうちの御前の上に桜をまて
まさしう思ひなと見れなるも御心さしもなのめならぬ御うんのゆへを
いとゝしく御ひきいれの御思ひしにこそあれとかくかくはかりてなき
まし給へり　孟　むかしの人はれくよりも出のゝ宮をさし
まち給ふは　こゝをかくらし又はうちおろしてそのゆへと出
のるにも御いさきもへかうしておもひとはしまかうの御物を
とれる也　河　上東門院よりと六年出たてこなうひ給ひけるに時
まさの清性寺入道前太政大臣

第三花散里
細　うゝへしるく人あるふるきもの奥山の岩ねの松もや年をはへまくし
此御歌を身一つにのみ給へるにや　弄同
細　なまめかしき女房の小松をひきつれてかれなるとものゝうへにそれ
弄　けふのたちひきつれて参りて御年をつもらせむや
こ松はおきさるかたへてれるにや　孟　むかしのうたなれはとのゝ
源氏をれやれやうかうかくしへとゝちふ給ふなりけれとかく
よかうふ松を引つれてやまとにゆふうちかよそれゆきされ
なるも也さまて源氏の四十賀をとこうけとちて給ひて給ふ
もひとつのるらむとや
やそめてなとろひまうしあふちんの行しきこえて給ふさる郎
細　でめてはおもてなれ也源氏もちなるやうにそとなるにひ
なし給へるや　弄孟同
さまさまのきたるものにいらしさまそり給ひさ
細　逍遥也しら

きのをしきさためてや　弄同

小松原末のよはひにひかれてや野辺のわかなも年をつむへき

細　すゑのよはひは人のよはひにひかれて我身も年をそふる

に譬ていへるとそ也　弄同　栄　源の君小松原末の齢とは

むらさきの上の事なるへしひかれて源も年を

はこも久かしんやうんや我身もかれりとしへてくよ

かく引て西の心を松のよはひにひかれまてくるふと年

をつむとや

河　また此世をかれるをもねと思ひたる年比すくともつまんとそよふ

るとや　かくてよりしねひなく上達部あまたこそあれ此君をしにつき

給式部卿宮八条わかくをあはしられとゆるしく有る事かに

式部卿家　弄　此上文也　細　掎拄の祖父也むかしれ不思とあは

しそたちのまへ給つるゆへにまゐしけるや

栄　むらさき此上のまたちゐ給ふよそほひは事のほかにめてたしとなりその

ゆへに大殿の御すまゐはむらさきゆへに父式部卿の宮此うへ入まほし

給へと事ありけるをいかにも源よりはなれて遠き御事

給ふとの心也

かくましきはなれてひたすらかたかたへも思し

自らまをくそてまうとも給ふる　栄　式部卿宮は源の御まゝとなる

まておもしきといふりましくきこゆる事かならすいかにもあるし

とやさま遣大臣さけて出給ふをもまてつくかんなとの事

大殿の君てありかへあまたる新御方へひかしうさきたる事にても

のし給ふもきにこそ雪まもをたてるやうさまあれと　栄　式部卿

のやかむらさき此上にまし給ふそひ給ふをも大殿はそれかうを

たらし我たう給ふをとかくるも心中まことにさまとや

御むすめ此宮にもちいつくるにつきてもおほやけたちゐくさまうや

くし給　案　大ねのせん服乃表着ハ武官のあをいろや紫きのあい
あうさまハ内々にはあてても難(サウ)くの便とし給ふとも指(テ)
挿頭(カザシ)の花あまたにもれぬやうたつ也　花細　弄　同
いろくさりつきてを　花　大ねの御かほれたるれいまかせても
又紫の中のゆかりまさくと
こまのうちえんくさ打まとひ打物よそちも　細　歓(モ)物舞楽物(二手)女樂より
おうひ打まの　案　舞よ入ぐる物四十二ろうなも　打揺物(オリヒツモ)
花　外記(ゲキ)云延喜二年正月廿五日御宴中務(ナカツカサ)卿親(ヨシ)王家親王以下
蒭擎(ステ)執折物(サケモノツ)懸廿挿(サツケ)　箏蕨之類或包鶴懐以
打捧物(ヲリヒツモノ)懸(ステ)廿棒　菓子をさし花也　作花物盛小舞盃梅柳枝以下執
中納言とさしあまりて御前へまゐるもいとうつくしき給へり
案　夕霧をうかもとりつくまもち給ふとも
御かたくまとさぬれの御あつ物まゐる　案　兵部卿さいのあ

つ物とり中臣ありそのかみハ也まうれの御舞乃するや兵部卿ん
さいとそめ給ふれことどうり　御　頭乃三さきもたかひれあ
り物一ある人うつわれ物給ひあり
白まへうちそちんのうきそん回　案　源の中まへ也
おほんつきともあつくくしとめれたるかとかにせうし給うを
案　御(ゴ)簾(キ)也
朱雀院乃御くすりれるすあ我むへつくさそえて給ひぬ見より
楽人なるとあめさんれ　案　院の御悩まれくと御さき有紀右楽人(カク)
右とこも消はまつくひよそくりよくあめきれとも
法華をなと打ひきおとしれそのうちそのつ給くぞ世中に二乎
御みなくうるを文めつくくさうの津くも人さうか何くしとの
頼きをくれる頼の乃きりをとり見ゆくしまうくきさ
又をさ紀えさいのひやうに法御あるひ何り　法華　弄　楽(カク)簾(キ)乃懸物

なり　細　管の緒あまた物するところよりの人へ行也

宗　むかしより給はせまれは父内府の楽のまゝをとらえらけ

こゝろもくちをしうや也

やうくえなきる中に和琴とハ元と故大臣よりの事ハまひ給ける法

おとるうきる物のよくよれらをとゝめてきこえてゆへ行へ戦

ねつとあしひきみえをとゝ人のうきたくみく色く給へ大事

総乃　宗　かえ内府一段乃よくよみくひきさる事は給ふ和琴と給

達ハ公乃人へをえらきたて給ひつよて息の大事之総辞

遐し給へとも給ふをせ申はるまや事への人ひしあつる也ハ公

さしゆくる給ふのや

かくいまのかるをとせあ給へてをたつと給ましく　河　固辞（カタクジ）せる也

おさくおとるまいくきく事にゆをよるれつきとよひる

うし　細　父おとゝ比おとしはるや

うしをえつぬてきそうしゆたかく色をあそれまんくく和琴

まく　宗　よもの息とふひなくくさやうなえつぬなる琵琶

事をよく律くへ給ふとも

まくへりきてうひく　宗　調子くにまくるゆゑ也

孫あるてとも　宗　秘曲（ヒ）ともまのす

ゆくさまのま方まらそれはくへいとも八中くく為まる人へときくてある

またなるを　宗　いふへよるとゆくまうたるまろくしよう律

うえるはたすりくきこゆるとなれとも

心よりまうをてたくうきあまをたる　宗　我々出そるてと

ものこさつくる事をとつう

まくくきたよろくの事の音ねとての人へうまたるえなる人に給ひし

ろくあやしきまてひく也　弄　和琴とにくきるゝ也　河　或説

玄和琴（ワゴン）乃盤渉（バンシキ）調（テウ）ハ弓（ユミ）六張をまちてくきこゆるして是とが

しもしをゆゝしと後の人理をりはくるむかしかきりとかつて
あてなる絃上総国乃済物のたくわへなりし文(モジ)にも六張とう
こさて河まて弾の楽料とかきたりしやそのかうしきなる也　賜物抄
栄　むかしきゝとハ一統につかふとさしてきこしめしるなとハかへりみ
おかの人乃御時の楽器ハなかなかとのおこなひなりしこと　調(トウ)事
なれとも内侍所のし給ふ也　和名曰　日本琴　万葉集なとも
倭琴(ワゴン)なるへき
ちかくおしはかることのともいとゆるになりていかならんとて
色ひくきおほくあまたそろひてゝおもかけし給ふ　栄　ゆるになる所
やかましき絃よりくさむかしやうてなくしてとハ調子を
さけなるへし也
これいひとてらんの名のねのまゝにしくあらきやうつきて
なれと　細　ひとくつかゆとハ和也あいなやうつきさとのなるなとと此

あるや父母とハ志てここにかねゆるくまむしかなかくのあるやうや
栄　細り同し心也同調子なるへし　河くさしてとハ下地なる
ふるひくくやのかりの音と色上乃音あて合とられるや
いとうしも色なとちりしとかくてちともおとろへさ給ふ
細　日たそかくたる事とかや八月のとさるましとも　栄　掬集ハ
こまかりとくハおもやさりしとの心をこれあり
きんハ大方の宮ひき給ふ　細　けさるや
弦上とハ宜陽殿乃御物にて代々に第一の名ありし清書とも
細　宜陽殿(ギヤウデン)にむかしハ楽器(カクキ)書籍(シヨジヤク)をおさめらるゝ所也
栄　第一乃名ありし清さとも此弦上(ゲンシヤウ)紫宸殿(シンデン)の内にある第一
の牧馬(テウホウ)なるへしこれはきんの名也
故院乃もとゝのへる　細　桐壺乃御方也
一品宮此ことハとなく給ひけるとこの給ひしなる

らをはゝくし給はんとせらるゝため 孟 是ハ悪后(アクキサキ)此腹(ハラ)朱雀院の
いもうと桐壺の女宮也そまこへ故院よりもまゐらせらるゝと
や内侍一品の宮よりもしるき事被入し
細 朱雀院の同腹(ヒトツハラ)のひめ宮也
おとゝ此ヤ給ひける 花 むかしの又大后也されは此ひろ
御かたの宮とめにや給ひける也
尚侍さへくせおほせたいとあまたにむかしのことゝも思ひつゝく
尚侍しのひける 細 一品宮へ太政大臣やうけ給つるそ此儀(ツイテ)く
とお思しけるも 孟 此趣も此儀さるゝむかし古院の御事
古院御のひとつ給ひとも
みこともおいらかに見えむ給ひ候ぬしきこえ出て
孟 是ハらんのこゝろもひちきて給ひしめ給ひぬとも
きんハおまへにゆつり給ふしきも給ふ拍のこゑにえうして給ひて

孟 無らんの宮ハきんとも深まてしやりうる也
めつらしき拍ひとつ給ひて給ひしてひとしくしりぬと思ひまく
おもしろきよの深あそひ給ひ 孟 源ひさうれあるへしとき
一品宮さ給ひ給ひとて
はゝらの人々くみらしにめしてもくれある節此なりさまいくし
て 河 清和延喜十六年三月清涼殿式部卿(カクナカツカサキヤウ)中務卿親王太宰(タサイ)
帥親王左二階下(カイカニ)侍従六人又唱歌(シヤウカ)
うたりて給ひなる秋の夜ゆくまに 河 五音(ヘンヨン)律(リツ)也
細 呂(リヨ)乃律(リツ)ありける也
拍のこゑへともあつしくうちて 孟 是も呂よりはしめて
りつうたるゝとこり
青柳あそひ給ふと 孟 律乃うちに拍也催馬楽(サイハラ)長生楽(チヤウセイラク)乃
序也拍子(ハウシ)十二是あり

きにねられぬ比のよはとろうさぬ夜くかなしく物まうつ
（花）ひとつ河邊の花京の月にふるさてかくいへり　細　山吹柳かり宿もと
おもしろき物へしと思ひたましょくもあはとやさ代
くさいとにかりてうくひもれと此かをもあれたる也　其同
宗　うくひ物かりおもしろんとうたきこえたるも也
はとうれしとのさ夜ありきこえし行てうく物をいとさやうさ
くれまくなきてなる也　其　四五月こそ過ぬ月にも宿す
ていかく也やさしくにいひて一勤ひ河なる八つまとよるを松乃風
（キ）義あるさやうなく八遠跡（キヤウセキ）とくさもとへもとくれるへる
あしやさしきとえひきしたる儀也ろくるとこそ申
さくみと八きこゆるへくし侍る也　細　山家の河の淵の宿
て宿ある浅武ちかや花八松のされたるもの月へて一服
ところ月にいふ侍る也

宗　むねはしるかへくしうる有れもなくいつしさやかへく
やまえ月あゐ又ことにや花宴まてかり山の祠おつ也う
なきふうしありぬ
あつきに捨乃笑いつり侍ふ河をくたを朝まると有けると
宗　源よりもむかへ人又やましくて物也
うき世をすつるやうにはくはつしくていはひとに　細　源の祠
宗（キニ）桜の中まて人もちやよしきとなれ八去出頭（キキユツトウ）のむと世をまと
やしろのゆくゑもおそしくもさりかなるると
（河捨遠）弁月乃ゆくゑもさへしぬ山様八ふとおのへとあやうる経まつるん
うくらて人まこしもはつりあるにつきてかふやうくるらん
細　よくうきへ夫ては侍けるうと也　うき人まる人おつりやそ
いかつしに谷乃松とや年をはまつくし
時くふむやはけるあとも見え侍ひて人よりし　宗　むかつくに細と

源氏君と我御年のほとをかそへあはせてしらせ給へる也と
の給也
かくおほかたしき人は何事もなきにさへ心にかゝるものを御心のしらるゝ事
とひとりわかくなりまさり給ふさまの御ありさまを思ふにや何事も見ゆるはかりを
たゝ四十にもあまりけるや何事も見えたまへる御よそほひを
いかやうに見たてまつらんとおもほしたるにやとそ
長恨歌をもひきて古へをおもひいてたるや 箋
源氏の御心へむかしの事をおもひ出てしのひかたく思し給はんと
おもほしなる也
中々に世の事さへかくいひつゝ思ひしられたるは何かはせん
そのかみのよしおほしけり 箋 むかしのことなとかくれなき御ありさまをしらせ給へる
ことおもひ給ふやうにあるとの心也
昔のことをしのひてのたまはするをおそれおほくもかたしけなくも思ひなりて
行てあるへくこそ侍れとまかりし給ひぬれは源へ月日をそへて
箋云 弄 まことのおやにもまさりて思ひかくる源の御心をしりたまふ
さてもと思ひ出給ふ事もなしとや
かくまて思ひしらせ給ふ事もありつゝおほえたまはさりしを
まことにて二月乃十より朱雀院の御宮へ参らせ給ふ
源氏の君これよりもいかなる事をかはおもひしらせ給はんとて
弄 むかしの人のことをおもひいたさせたまへる也 細 いかなる事を
御心に源の御思ひとの也 箋同
かくれまゐらせしおりのことをもおほしいてゝ 細 大形乃言葉に
たゝ御事をのみおほしいてゝ女房たちもくまなく思ふをつくして
せ給へり おもひのほとをしらせて 弄 さる程や
ゆかりまゐり給へるさまをきこゆる事のおほくて御覧して
なとさまにまかせてしたまひしを 細 入内の儀をとゝのへ給や

河　源氏院号の後なれハ入内の義なり准せさせ給ふえ
入上皇と宮同事也　箋　女御なとの入内の儀をまねひく沈
乃法のやうに源の法くく人々御調度なとをそへられけるも也
いへも法くあり　箋　ことわりにしさもうなるそのことなるへし
法とくらとに上達部あるとおもてこまかの給ふ也をもそへ給し
大納言をやもとうしれ上あつくてかつなの給　細　蔵人大納言也
法車よりもをめる所りて院よくうるまおもくあつまりおはると
まに人々をこうひうるけるもや　細　院下ハ其にてをそへて車まと
よりるも今源ハ院号なりおはしへハさ御きりしさ給て
ハ源乃謙退の義也　箋　院下ハ妻子をもむつるハ男
出てく車よりとおりるもや又女御なと入内の時もさやう
なれとおもへるも也　六条院とまてにハ太上天皇になしてまつる
らせ給へともさやうの御事まてハさらにおもひもなくよ

てまつりされし　卑下ハ礼のよし給也　河　卑下ハ礼容と延
容なとうつし車をとりする礼也　ことに院中ハ義あて付儀
有へしさる見給ふ　六条院たくへのことくあまねくゆく
泣きし給かうて見　弄　空云卑下ハ礼を密にむつまる時
こうして車をとりするも也　河海ハあり古る也人ことさ一動
太つなやくかくれとしてこと
ゑらんへ下おもとをされてうるつの上とうまつとおりてうち乗
てまあるをにも　細　有る故也内まつりあつくとます
むこれ人のそとうりんみとおとなうけくめつらしき法中ハあ
もひとものにあすん　花　宮家のさうくハ詞也　弄　其綴の手也
細　信るは衆のにあり　れと綴をとくいはうくひあるとうさ言ハ
上法皇ともれハそ述あるとてうくひありてと言ハ　箋　よりの花
のむこことうりんともれれ太上皇や又太上皇とりんとも

まだ文なども此世この御かへりも参らぬと云事也

三日の夜過て此院よりも何となく此院へかへりも参らぬとも御かへしきこえ

やひさしく給ふ　宋　宮の御ひとり住をもおぼしはなちや

たいのうへもおとにきかれて宮をもおほしまさるのありさま

ありきたる歎よりさしもなく思はれぬ人にもおとらぬさまなること

ともあるまじくされど又おなじく姫宮ならずなるひ給ふく

宋　紫上も女三宮のことをもあるまじき給はざるとしのかれさせおほつひ給

ひとつ紫（まじり）色しあるまじき事也

花やかにおはしまさぬにてさくはあきつかたあかきさまのひかりそめ

給へるにおはしまし給へるもあまねく御覧じつれと猶さすがのこゝろにて

おもひて　宋　女三宮の御かたもいかにおもひなれとおもひてはべりおもふさまを

これ給ふやうとはおほされとも女三宮はおなじく姫宮にもおなじやうなる

ひ給へるさまもかほりおほしものをもさまでもなくなりぬるひ給へるを

清らなくまでいづれ給ふとも

御まへの此頃ともまろまでにもみえさせ給ひもおぼしてなさせて

いとゞらうらうじきもおはする清らさまをも　弁　女三宮のまゐりをなしたるに

も紫上に給ひ也　宋　源氏紫上と同じく女三宮をあつかひ

なひかせさせるにや

いとくちをしくもおぼしひかへさせ給ふ　細　紫上も源のおりかゝく思

ひ給ひ也　宋　紫上の女三宮をあつかひ給ふを源氏も給はく

きこえぬにおもひしとも也

姫宮はまだいはけなくおはしますさまのいたはるしちかさもあるを

いとはかなきにくしき御心もちはまだひ給へり

宋　女三宮はおさなきに御身もまたいとけなきに清らかなる也

くさまのやうにおもひしやうに十かまゝのなかしはべるにすれ

をかへり

かれもさる世のゆかりまてことに給へりし折おほしけるに
逢見たてまつらぬひさしさを　呆　紫上をたのみつゝ給ふ時の
ことなとも逢ハゝさらなくとも申てつかひたまへと也
これハいとみたりなるのことにて給へハよろし　呆　女三宮を
一ところいとさまかくのこと見給ふと也
みくせにをもしたちたることなるとハ宮まつりみゆるもおほしを
物うらいとあまりものゝたへなき法さ事くれとみえまうす給ふ三
日の程ハとかれなくきこゆる御なを　細　姉妹なとの給ふをも
宮まつりこえしなり也　弄　法のおんをあつまりつきと也
呆　女三宮ハ紫上をおしはかりひなとも事の給ましき法なれ
そのたえとく源氏のおほしめしそ法なん也
年法ことなとひ給ふ事心ちのこゝろのみれと後物哀なり
細　紫上の心也　呆　一つとも源の逢給ふこともえなくひ給ふ事

たまひ給へとも法ならぬ哀なる心也
御そことのふといふ事をしてさき給ふ物うしうちなる
めてまゝのしきかしきしくらうたきにおもほし
細　紫上也　呆　紫上の此給ふ程ハ源氏をもとめ給ふ宮の法なる
へ法ゆあれとのさ事也
なをてらるゝのさまなりこえ又人をハなくみゆるへきそ
細　源のみやうちや紫上をとさしてときそて又もとも見ゆるへきさん
こともえ世と也　呆　なをとてやうかうまし源のみなりゆう
やうなるさまとも紫上をおもてはた文人をたえなくへま
しきの心也
法ならくみのらくおのつときにあるわかれさるにて後
なるとも出ぬるそうし　細　我みをそ此ゆくへと也　呆　たく我ある
法ならくみのらくなるゆくへと也　法の給ひかのすることハうつろへ

あまひさしのやうに女三宮をもしへ参といへり
かくれと中納言をとハえおほしかきはかりぬめりましさと
我なからは清くおほしつきしるに源くもり猿く
細 夕霧ハ雲井雁のかへなく又まくも右もわるきもと見
こゝ給くと思ひてもつ給るもなかりしとなあ見ん人ハ
きゆへとや 栄 ゆへんより夕霧をとハおほしかけぬとや
あのひとなりとおもことゝかりしもゆるし給てん方さりしもよも後の
とるしおらんしてそ女房くるもなかきなる人々れ 細 源氏
紫上へか給ふとも 栄 是ハ紫上へ源のまうとひとりもしとハ
女三宮へゆるし給へとをしまてそ女御の細也
又さるをもてなの深ありきこしめさんるかまとなかられ給へる
源の心のうちなるをきたまり 栄 女三宮まいくほとなく程
なきあもまさしくめさんをもかうしかをしてひとつられのかと

あかうるとをなかりやハ源の心をとゝしもあらんと給紫上の
こゝろ也
もてなしほとこまて 細 紫上也
さらうの源の心なくしきにくるさこめ給ふまうりちるまをます
てなとなるをもちるにもいうこにゝまうる人さきめりやいかひるを
りとなるをまし給人ハ 細 是より後のとしてあかんしてそあるか
うらをもなうきなる人々れとおもるをとらり 栄 紫上の詞
や源の心んをおへさこめりの給ふをとハいかにとして紫上ハ
たくさめ給りんをとやもとりもゆるをも源の御心にてそ
こまかなるのありれそなるをハとれをもたくさめしとやいかひ
あまさにとりとまし給ふをとハ源の給ふなをとりひともあく
とりあし給へえりつしきとやいかひあるくまりハ源氏
紀るるへし此段の心え紫上のまちなひハゆるし給へとの給

ひく文治の三ヶ所ともわりちかくいつくはけしめ給ふく
の給ふに源氏の紫上のところに給ひし泊るよし
えうしさんへお頂して侍らふをつきさ給ひてまるまかし給へ
迷ひし侍るものをかきよりも給ふく　宗　源の侍らふをつき
てうちかけし給ふさ夜をと云り
侍るものをひきよせるく　細　紫上也
めぐちらくうつまし八かそ憂世中をゆくもと思ふとくとかのとけるれ
細　さくさめるをよそも也　宗　紫上の事也ハあさくるや源の是
給ひし女三宮をむかへ給ひて眼前（カンセン）ありうる給ふこころやと
さてもあれもれとくわかものをつるのをもよる給へり
河　悪（ツラユキ）之集（シフ）女乃もとよりまさとまうさるなり
秋霧乃下葉よつきてめぐもちくよるある人のんやまて見る
かくてとかくとひきまかせをとりて見給ふかくをそれさるなされ

とも又にとなとりりけく　宗　此哥はみくるうちなるをとおきさ
うき給をとふり
花　いのちこそ絶ゆとも絶えめさためなき世の常ならぬ中の契を
いのちハたえもとひかもとゝし此哥ハうろかまとしきるや三
四句のんハ侍さめるよ世の常ならぬ中の契りとあちやまとなし
細　此二人乃契ハ世の常のちきりを思ひぬちきりかといふ心也
とや　宗　源の人へ乃紫上と源とハちきりたへかくハあれと八はなれ
侍さめる此世の契りあくハあまりあとにあとしひたゆ
るにとあるうへ命ハきゆるもちきり変（へ）へうくへかとや
とくにありとみえさる給へるかとひとくうつくしくきかきさるる
やをくのうちの給へハあるよりにおもしろきにてもてはやされ
みかひにくやきりり給ふつを見ひてをしかるをひとまやらにハおあら
もとし　細　源也　宗　源紫上の様態（キタイ）をうち見て女三へえ侍

おほうち住吉のかみのしるしにてあるとや
年ころさまやうかんとかしこともいまそのまもて
なれかむけりさしかへかくこそきとうちをまゆくもあり
ありくてかくようのさくみくるもかのゆるしぬことのつてきぬる
よねのひさしもしへきせ人はりさ海すもおしさりされた
細 住吉のかみや槿(アサカホ)斎院(サイヰン)なるとのゐるなる也 栄 槿の斎院なるとの
るまもたうにんのかりあかりひしりとそれもそうるす
になれいとへかやみるもあいしとかふま世にさくみ
もたまなしぬ女三宮よりお人へ更(サラ)にも滝(タキ)の代世の
ほさあもはしぬそとよるまなそとんもとなく
そひ給とやさしくもうにそへのしさ系へほうれに
まいにてそへとゆんし給かまの利や住吉のおもちつ
きたるとの利也

ともるも境ともかしろかくそおほしなりぬる 細 世間(セケン)石窟(セキクウ)也
かくれるかるもと出来なへきとも也
さくそはまとまくまさしうし給へとほかくぬ人くともお
まりひとつかるせなりやおほとまのし給やうなれともみるを
これらなるとふ浮もとそひあへ 栄 住吉のこととやうなそて
つきなしとほりてまさしうし給へとも也
かきろとへく浮ほまのかくさくし給へたえそ さきり
弄 ものとくしも也 栄 世俗りさのまくもとなる也
事なくなきしりにもあるま 栄 ならる也住吉人あへほりくく
くれそほしさひ給てくさほり給とや光ともつく
にうて勢なるをおう
さしたちくかえうるたるありさ海りもとれてもえまそ
くし給りし又さるもとてたれきてもいにつきてをおきとう

むことのわかんおもくかのつるさてなつかしきにおもくうとをい
てさちなんいうちことのかさてつらちゝてひかのきりしけな
ゐるを　栄　女三宮の御やうにまことに給ひくはしくひかそ
花に喩れ給ふをとえまてくし給ま　しきやつ見さつかて
と志かどんハ中をとりぬるをも有さくハかしとゆてこん
と女房たちみえつくしひなけく詞也
源氏も見しらぬやうにてきえひ行りしく物語なとし
給ひてつ森をく成まてあかれ　細　紫上也何しぬさ給を
はゝり給也
めう人のさくおしもいひさるるも出来へしとおほしゝ
細　紫乃也也
かくこれつ追河まて物し給めれと　細　紫上の詞也
宮にまゐるひゝ心まめりしくきくれかあることつかもあり

をとなめまれてさうしもくおほしさるかたにとのこゝやかく
かゝるを給つるそめやさてゐれ　栄　紫上をてしめてかゝる給ん
こさるかへく花ハ女三宮なりもと給ふそ紫上のあや
さてくハ何事との心也
柳はしハんのさもねなやわかん殿もひかのしてあかさま
けしきをおかすくをそてわつさまにんてやとりもちさんを
もえん　栄　紫上のあさあき花なりや女三宮ともつひたく
さひかなをんしおしきさ給はかやあさんとの心也
ひとしきほと御とりさ給ひなと物もかくなりてたくあそへる
見く御けしともをのつかうてくるなるとあれてくしあかく
さ給ふるしさほとさあめれと心をてうなとされなきうしと
あんなふかるとの給へし　細　何事もとへつゝにはかるあれそ
かくなりも出来り々もしてハ内を容すくへきるつもな

さとや　細　等閑に　そのとさる事の人々にて給ふさ
んとはつめ給ふはいつけるもんとへしきさまのすれハ
あり々ハさかりてとこれにましかとかと思ひけ
の給ふや
中務中将なと御けしきをうかがひなとかたの住
をひやかなるもすへし　弄　もとハ源の々としけるしも御へ
下河の御かたにて思ひかけたるにおり　細　いかにし源とそ
とをくらんくや
昔ハなにかしの御寄りけるひらかしに給ひし人々ともあれと
細　此中務中将なとも又しめの源の御かたなれくや
年比そこの住ものになりしかくとられ人をも今にゆきなき
里　細　思ひよれ侍るたちらへしこそとえこもるへくちかとや
れとおもひくらんとわかくに物思ひもしんましとうとをひとな

きこえんくハなかくもかかへとをあさましまかるしとき
らひ出のし給ふともあるを　細　是ハ花散里の君上なとゆり
とも女三宮のもとにおほしめすを思ひ大かた御目をしらんと
とかくひ給ふや中々にうさしく我をかへやとそひくかたれ
今さらうらやましとあかむ思ふ今ましまさへハささしそ
との詞也
かくやしきらのへくそ中々くるしくうれしき中ともいとはる
ちうれまのあるとそうさのこそをひなやまんなともあかれ
弄　思ひ上給　細　思ひ上の詞也かやうにさ御くるしうつひ給
かと中々にうるしとやつのちかしおそとうへそきのとを
をひなかまんとや
行まうひきしきこうひめともえへなつしきへやとうめんと
細　思ひ上これ也我かやうにもとしくよひなとせし女三宮

へ源のたましゐをたんさくしたまふやとへたへなきなむ
ことくなりかなや
心のおくあけおぼしめし[illegible]
まいらせし[illegible]
ちとせ[illegible]
宗 我[illegible]
[illegible]
[illegible] 宗 源[illegible]せに[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible] 宗 [illegible] 源乃[illegible]
しらさりつるかなや
河 宿 [illegible]ある時ハ我身[illegible]

[illegible]
[illegible] 宗 源[illegible] 讒(サセン)[illegible]
[illegible]
しるかなや
風[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible] 細 余(ヨカニ)[illegible]
[illegible]
宗 [illegible]源乃[illegible]かなや
[illegible]
[illegible]

細 源の詞義也

夜更ぬるまでもろともにつくし給 細 名高き程にハと

つゝしみ給也 宋 是ハ上にいへるとおもひ給へりまされとも

女三宮より源のさまなどゆり給とぞや

つとめてあさきちかきに有様よろこびあはれとさこちゝくおかしひ

おりつゝさとおもしろきまゝにて給ふを見なしまゝて侍

宋 女三宮のことをいへり

あまたくれ乃雪に雪のおさなきつゝもおとつゝにしまりまてよ

中ましまる詞ふれたる

河 ゆき(雪)ましハましきそ我ハまさりひぬるとふみのゆきぬまたく 宋 明暗(アケクレ)やあまたゝみの文ちらさん也

またハ行夜しとひとつとこる事 雪ハあかしにのいれた

雨つゝるゝ夜のうちめ見てしけり夜はとまるに

細 ましつゝ心人くりとの也 私 あのとしきなれん給とおのくろ

さむしかるべし 宋 源のさしつれをと見んさくるめれとら

詞なるべし

古今 春乃夜のやみはあやなし梅花色こそ見えねかやハかくるゝ

雪のふれる夜とも思ひやられてくちをしさい給ひつゝ 宋 源の詞也

子城(シロ)陰處(カケノトコロ)猶(ナヲ)殘雪(ノコレルユキ) 衙(カ)鼓(コ)聲前(セイノマヘ)未有塵(イマタチリアラス) 庾樓(ユウロウ)曉望(テウバウ)白樂

天(テン) 弄 詩の心の内一勤子城ハ小き城乃城か雪有り付て白樂天

乃作を詞(ジユ)したるとなりけり也云々 私云 衙(カ)ハ守護(シユゴ)の所也庾公人

乃名也 細 樂天乃詩子城陰處猶殘雪衙子城ハ小き城をきりけり其上の

くるまも也ともかしこまりへるを心得よ

こうしうちたゝき給ふともひさしくなとことあかりつるなる

ひとりへくとも 細 よろしきも久しくかゝりしとも也

みく給をもつゝやくきもをきまりてひさしかきつる

細 源をさしいめん也

さうれくへしうまつうにみをもおもひとりたるまゝに　細　源の詞也
雲ゐをすてしも也
おちきこゆるん乃御ありさまにあはれなるはつきもなし
やゝとて此そひさやうなるとし給へにもしもまてうちなく
乃袖をおもひさうしてうしともなくうちきちからうるを
あめそゝかしぬ清らうふいるといとまつしきにわり
弄
人て紫上りおもちくまそく何をてうる也　孖　源の詞紫人
おもてるにうるとおもひいへるとの給ふ也此詞まかう
乃まをあくらむひいて給ふるらへし　孟　源の紫上をおもち
まへいそれるをきはくをえゆるし給へと也
うきるともる紀人と中の御まとくうある世をとおほしくへる
弄
女三宮りおほしうしるも也　細　女三宮はうくしゆる夫
下身一也されと紫上は御とのゝうへきちなれとも
孟
女三宮とゝせとうともうたはうる紀物うも紫上りおもひ
くらし色給とも
よろうふありへのまうをおほし出つうるをめうさ清らし三紙
うらこ中うし給うて此日へうし給つれとえうるをわりて
孟
紫上のうくをうるれと源うしうちのひくその日より女三へも
清きあるさとも此あしへ乃まとは懇（ネンゴロ）ろ乃ちへも紫上うとも
いとゆあるれつまへまり
えん度あそ清をうへこと中へも給　細　女三の清うる也
と朝乃雪うり四ちう何ゆまりあいとうすゆれし御き也
細
文の詞
んゆとれうしにきとめしひ結とあり　孟　源体息（キウソク）し給ふと也
清あれとさ中のしさを給ぬとそうるとちとみにゆのしうると
細
文うりはおしまて詞ありてゆへる也　孟　源の文を女三宮まてまの

かんなきものそこなく源へ申て侍るなる事しともきこえ侍れは
御かくしたりといへり
おとなしきあまたの御返事をは侍すくしめきなんとと
ものせられし　細　源の心　栄　何事も御もてなしもこそ侍
なからやうのん也
ひところのはくろかんも御用をと　栄　院の御用しめて
うとおり此院の女三の宮へまゐらせ給ふとの源の心也
ゑいきもおもしぬとききて御ひとしとそうし何事もなし也
あらしたる事語　栄　何とも何しぬとて御かくしとの心也
何んのこととくはくろかきぬとの事をききてひとりてそうし
とうり源もその世をとへるしくといひて語給ふ也
女君もこひやうなる文はんかれとこそしるる語　細　御心也
　栄　御上の女三の宮源の御おもてさせたまふひやうなるそこく
くるしかる語女君の心也
御さまをは六の中に御用との事をり給ふをき給ふく宮の御
ふかく御文なとまゐらせ給ふ　細　御目めなる人し
ましたちもりまもとはれ給ふ故なれとはかなてるとひきそめて
ろひなく　細　人のとを給しまかせつにかくきたりし給へり　栄　女三
宮へまゐりしをみてき故なれとこそなくましまさ
もなくてるとはしるひ給也
さろきうらに　細　もとくりしてききも也
中宮をそろふかとはおもはれとも御きさらるおきさの何そゆき
花鳥
くりまにてもしにみるに何の宮は御かたへ人のこころなるとかり
細
きかる人きかとの宮女そおもしきれとも也　栄　源御女三宮を
の御をとあてくうかとの宮の御にけしきをとも御心なるはま
しきゆへに御されあそ宮にんの人くれはいかさくろさ

つるやうなるとや
むめはつほみたる人にして紅の色をこそにほひなき物なれと
のたまふやうにて見るにしてもちくおほしますに　弄　女三宮
此後を見をまちたまふ也　細　何ともなく紫上をあひ給ふまし
むらさきのうへとをさきとたまふ花をまことにちらへ給ひつ　弄　又を
浅ましく花のさかひなるへし　細　又もしつま給ひし花の錦
見たるなるへし
とともに雪山のうたにつかはるゝ也にちかまたさりてなにもなきとなる
をかしけれは雪のよるやうにくちをしの花をそへたまへるにいつれさかなる花
さるを　花　詩り法律（ヒツトモツ）といふ也
河　かうそみてとまりつ雲にむもれて花の色をそれにちかうちらなるけしき
袖にそれをみる人とて花をそきらうして見ひとをそへてけふきてみなる
給へるけさり　細　折つま也へ袖をそ白人梅の花ありとやちかくり

雪れなくうこひまとと雲のそらにあかりてるをそて花とひ
きかうし給ふ也　宋　花をもちくしゆかしさ出ハ是花のそと
のこ袖をそみち人花ハあふさとゆうとやなにぬすよと花を
くらして雲とをやかれ給ふさ由好なるへし
まなともの源人のおやめくなりとあとも見とらぬか日よう
なきぬうき済はまおり　宋　是ハ源をん人のおやとい文
太上天皇此世りとゆくてあのへとをいひくくいへるとも
いくつしくらいしきさ由とや
済なりもくらいはとあるこそちもまれたちう給ひく　細　やそて
見へつしてやあることれなくみくぬ也ともやうて見ん給へさ
のんあまと給ふまうに入給ふ也　宋　女三の済をゆきくう
ともてこや
女宮り花見んをなまり給ふまれといひてかくこそおかうへき

名残に　細　梅を評していへり
梅はうつろふ又ちりかたもとかくいはるゝやあらまし
なとの給　宗　此梅のさかりと梅はいつれはさくら花の比
あそひもをかしとてあそひしとも紫上をとそ梅はなを人
給へ(いま迄)ハそれよりさかりはもてはやしともなをかきしとや　花鳥同
拾遺
梅かさやと桜の花り白つきて柳の枝はさゆる郎
細　花鳥説一義花のくらしさまとなく花の上ちる頃を評し
てかくるにくきたりたえ此又あるをはけかりし給へハ紫上
のこゝろとをそへさとしてやつれ花のこゝろとむかひ
てまつらしりし給へるなり
こまこともたまへるぬ心とめてまつるなやあらん花の
さかりにあそふへきあ人をやとの給は　花　紫上は此御あま
さにうつりぬるとめてまつるなやあらん花のまうらに

弄　あそくはやもや女三宮をとひもそを給へるや
花のさかりまり桜は梅をともちくまにあかたそやふかや
此詞ハ紫上より源の給や此時紫の心をとりてまつさ
りしに花のさかんしも女三宮紫上なると花を
名ともいへる義ハ紫をとちらはあまさうちぬとも
流花(シヤウクワ)の未開(イマタヒラカ)時に梅れさく花なるやうなるや
細　唯たてまつるとやうくやいひくまさこうりしに紫を給へるや
紫上をとるにさめんとて此きしく此るすとの給ふ
や花鳥説無益也　宗　今は此梅の花のあまつさきは
ひらる時なくく清さんしたさとや花のさくひらすむ時
又給ふにしからやうに一しかるとそいふもや此詞源
の心を説あり又紫上のと云説もありなきし紫上此
詞とこれよりともおもしろきさまにいへり

御返あり　・細　女三宮より御返事也
ならのうちやうはあさやかにをしつゝまれたるとも御は見え
て御手はいとうき紙にかきて見えをきましてあらしそやねて
とみえたれと　　　　　　　　　　　　ものとふらり
きこゆる給也　細　女三宮の手跡乃幼稚なるを
　孟　宮なるとれ御てみゆしはまうけにかえく
なれハうなしくみ給へく紫上のみへ見んをなくし
とやうき色紫上なりしやくちんし給ひてハなうさ也
御なくしうやうなくんハ人のほとくらしをなしとおもはに
りうきくし給りんさんをうき給ひ人なれハなうそハうろを
給へるとまりめふ見んをうきみて　御なくしき　孟　うつろ
ぬるうをおり
ならひかし給へり　孟　紫上のさ海也
なうれくてうりの宮あや御ぬへき風はなくうす雲乃御ぬなる

女三宮より我身をうらみたる也　孟　女三の宮の御返の心もうき
にうきよの中の雲のあまの雲わやうにわうみハいりくみと
御かてうものをうたにそこしなりんとゝさくそうそ
給ふものんや
御まゝたいとことくゆさむをなすなさ　孟　紫上のんや
さまうるされほとになりぬる人をいとうくハおもうをぬ物をとゝ
めゝまうれと　弄　女三宮わかきと紫のんや
見ぬやうにまきをうりし南やう給ぬ　細　紫上れのうつ也
孟　文なるとくやハうやうみえ御てあくうしぬ物ととおもひ
なうしこぬやうのし給ひてやう給ふ紫上のさ海也
ひとんのうへなうしえさてそ御なれるとハ無ひく宮のし給ふ
なうれと　弄　源のん
いとれしくて　・細　こと人のうおへしまししハさやくやとの給

なくさめよとや　宗　源乃心也女三宮めくましくまうさせて
はそゝくあつかひ給ふく心よすゝもの給へるをと宮にて　お
ほしまとえんの給ぬとや
たんなるくとたのひとよし給へとのゝ宮のゝ給ふ　宗　女三宮
ハ一向まいらせあられましくなれん心ありん心たをくとひ
あるしあへとの給ふ也
さうし宮の院へ〳〵に見るところよ給ふみとにうちをはう
し給へる院女御をと乃まする女房ちとおほして見るらひ
あやしとおほゆめしおほんめれとるとやうの御身にある
人くそ　細　源の院のうちも三条乃後ハ見るなりしめて見
おまる人〳〵也　宗　源乃とにきさして院のてとあり
いそやこれ院にかりき御ひとわしそめてさけまめきまのしき
ことハ御あさんしやうちまうきてすみとあける女宮ハのと

なくさめたるに御さなるれさ御めてハ院えつゝひあるとれいとく
しく　細　宗上ほとれ院おほしとえとなまし御心をへう
らきとにや　宗　源御ハひとつもして御えなり院にうつりん
くとも宗上をるとく給ひきのひ給ひつゝかなはきなる
ともいてこんなとかへるともみえとや
よろしくうつりきにあつしくいるすみんとなすく物それ
ことはりとめて　よろしけく　宗　のたまきんなるへし
いとはそてうちめく　宗　女三宮ハちつきくましきまをハ御
もとくさ乃院えゆそへくうちたるる御をいへり
ありとなくけへかりことにそちるきてもし給ハぬ
あへり　宗　のたまはりあなるをいへり
たゝちこの物をきこしひせぬこゝちしてん心中をくこゝろ
きこえまし給へり　細　いときこえさせ給也　宗　いときこえさせまさ

そのへさうひとせんはなれくしきさんや
院乃みかとハおほしくもくうれるかくのはたゝちるもこそ
んもとちすくわりしまれとせんたひさあれゆかしさすち
なさめさゆへくしきうさんてまさるを給へるを
弄　男らしきや　㝡　朱雀院ハちゝ才覚のうさゝ不完に
まし候もとんへきやゝ　なさめあるかくはんへり
まさりもおはしや
るとてかくおもひしかにわつしたて給さん　おもひくらう
細　大やうや河海説可然也　㝡　女三宮をもえ仰とてかやう
よたゆうにそえて給ふそとや　おもひくられ相くみて
ゑゝのしきうえにみゆるへし
さらはいと清らかくめ給へる清ゝとさくしをとゝもなま
くちわしたれとみくりしもそみたまはり給　㝡　女三宮ハ院

の一段兎子ふくましまはと出給へとも志ろうへく
ともなれうしやされとみくなくハ志ひ給ふぬ源のへぬ
らく出給ふまうにみるみく心ちすちさ給ふく　㝡　女三
宮ハあるにとあうとも人のわやうにちひさやもそれんと
やはらくしき心あるへし
清らへあるとも御陰給あるすハいゑをるくうちの給ふ
てえらんそなさもてみえ給　㝡　女三宮ハまろうしめしたる
らうるとそいりへし給ふくおされまうしきさうち
たる様とや
若の清らかしまゝしうえうそて心おとろかされまいらせ侍とさハ
世中をとみるなさ由くに　細　源のそうれ時の心乃まくなるへ
いとひもし給へきとや　㝡　源たちしえ女三宮乃
やうにほらくしきやうなる清らにあひ給ハぬハ

ん哉とらし給はんとや
おもひなくしめてと行るもくなるも　栄　源の心苦しかるを
いかなることに加給ふるとのんや　花　それ人の心を
ほとらりぬるさいてあいかさとこそや　栄　一段とくれさ
るんとまれかる心なや
とりくはそおほせらいすなれ
いまよく知らし給ふとの清んや　栄　人をさ申くてうする物と
よそれ心ひいつとおしくまありしき給ふありうし心おほせられ
花
源の心は女三宮をうとんにあらひしいよろつ何くまかり
しき給りおほせしと紫上はさし知らへ見給へてお
すもとく我なからもおくれとしへたて給ふると思ひける
とや　細　とは宮をとあいかりゆるすいやうそてなりしれ心ひ

ありいつめしかるへしとや　栄　女三宮ハよくもすてさせ
てきへんきもんをとりまちやさんほとくや
さしあくひめ宮ハ見給ふまり給ふる　細　紫上ハ我よくもそ
たてまつるとや　給　紫上より年月かさなれ給しをとこそや
やしほうまもさそいろうへの法有給そさるをおりくくて
進上あくもおはりてさせるとおほせて一品の御かとあり
あめさもうちてくかありかれくいとしくしき清んさしれ
まくらをと　栄　女三宮のまへり給ひよく紫上を大切(タイセツ)
えり源のおほせしめさせてとや
栄
ちるとくおほけゆらんと様くしさまりてちすん院のみかとを
源の清むま一級の露さてもありさきちかくく紫上をこひし
くさひあかそうまあつくちのふとて色ほとそれくそ
とひ給ふきゝもさくしくおありしめすとや

月はちかくなりてまいらひ給ぬ 細 二月中也仁和寺より
ちかう給也 弄 女三宮ハ六条院へまいり給へる二月也
某 女三ハ二月ニ六条院へまいり給ふ月のうちに院も
法寺へうつり給ふとや
此御よ住なれたる所をも出給ふとかや 某 源の御ふる
ゆり朱雀院よりも文参る也
姫宮の御かたはいはいしたまふ 弄 六条院への文のうち姫宮へ
中にはなにとやらむ御心也 其文の詞也 姫宮の御心にかゝ
なからん中にはなかなか我心さへそむかれ給ひてよくいふ事
しも給へとや 某 おもくやとはいとおかしき御筆也とあさ
らうたきもの也 院の御まへにのみすゝみありもとて
ゆかしうなる御心地しにてかくやとまゐる源の御心に
まかせてまいり給へともひとしくやうやう也

ものうくかへしてはおはしましてしかも給へるとおほしく
てこまかくも書てちかくまいりて給へとあれ
ひくく宮へ給ひける 細 このひとへの御すゝめをもとめて給ふ
かの給ひても御心ひとつにおほしへしとや
さこそとこそは給ひしらぬくおほされくおはしける我心みて
給ひありしおもふのもたせくきことは給り 某 院の御心也
女三宮の御事にもおほしなからもあるとの
御心也 私云されともある細ハなし源の御心とたる
名さへまさや宮の御詞り
おさなき人の 細 院の文の詞 并 弄同
御よはひにかほあさくおほしのふさきをさなく御心にも
てらしうとも給ひ 某 女三のおさなきをとらへさせて仰
給ふものをゆるし給ひてうしろさま給ふ也

尋給へきゆへもやあらんとて　花　女三宮と紫上と母方の
いとこにておはしますゆへなりや　細　よろつにみ此人あやしき
ましまさぬゆへ也　女三宮の御母と紫上の御母とは
はらからや
うちきこし此世にのこる紫上へのちにはかなしあまた
花　此世八十よはひの祖也　細　同　栄　朱雀院のさまもあはれに
みき姫君たちもなからむ世におはしまさむ後は法の
みちに入たる也
河古　よのうきにあかぬ山路へいりにしかなしき人のあはれ
やすらひたまふ事をも聞しめしてやすからす思ひし
と思給へて　栄　女三の宮を紫上まての後見に給ふ
ゐることもあらん此御事をこそ思給へ
なほかたの御世をしらすこそまつりし給へとて　栄　紫上は

なき事にてかたきとのみ也
御後はひとよ女房してかたきをみなすくしなむ
世給　栄　紫上の御心のひとを女房にそ何ひしらへとさきを
ちるや
御かたの事にはかなきをもみえてはゆうしくはよしとくし
見知らるる人へさもあらぬとおほえてねむころや　栄　紫上のこころや
みやうれ何とも知らすさうらふにもなくてそのかなしきね
ろうかれたるをこそまたにゆつりてこそ給ひとや
かなしきとのほにてかかるさまや　細　懐とものあはれなるや
うちて世にうつろふかさしをかしなむゆへにけるをそ
なきことて　細　此世りのことはりたのみたまふかなしき給
ひそかにや　栄　かくてはと女三の宮のとおもふとなるへきお
御しめさせて世の後のむさき物ひそとさかひ給

弄なり

ゐとゆう女そはなちかたし女乃侍ふらふにおもひあつかひ

くるしき給　弄　裳きせたてまつるとや

侍ともあるまてたまさかに侍らんしてなにことのとしころ

をなけかしふるに　某　紫上乃手跡志りたる人をも侍らんし

て後の作心也

以上のことは御身にそへ給へんことはいかにとおもふらしはかりかたく

某　女三宮乃御事や紫上のおもふらしきかはりにはしらひ給ひ

てはあるまての事ともなくなり給ふ朱雀乃院心也

とハ此て女御更衣たちなとをのこしてうしろ見給ふも哀なる

事なれはかりのある　某　朱雀院はいかなるをかはらせ

くとちかくかりつゝ行幸の哀なるとや

内侍乃君ハ此后宮にすみしましし二条宮にうつり給

某

朧月夜ハ大后乃おはしましし二条の宮へうつり給ふとや

弄　四の宮の宮にあつかはれて宮とよふ也　一説合点也

悪后は父乃殿なりしかたにや二条也とく

尚侍の君のことをきこえてハ此侍ることをなんかくかへりみると

をおほしたりなるはまて嫌なんとおほしつれともかゝりし

めなく　某　朧月夜とハ女三宮をなかさまにまもりて院の見ん

ことにかくなりかへりし志給ふとや

志てふやうにんのあらそひしをとのさめ給ひてやうく御乃

侍ことちるをいそうとも給ふ六条院おもひは哀なりかの御おもひし

て　某　尚侍乃君ハ尼なとに成給ひんとおもひしかと院の御心ま

さゆうなれハ志ひ給ふやうなく院の御心わかくしき

まはゆき給ふとや此御心の侍ことなるとそいそき給ふとや

やかてしあさゆきなれハ出しはとこまかくいりあらんおはりに

きさいのみやにまつ一たひおもかけさうらふみなのことも世のまま
ほしのこおほしたるさまにてよのさかみもあらくなりぬ
大きさきの御とたに　宗　源のうゑ也　朧月夜の事也
いとわしき世のさまをみるとも思ほしいそくるまてかへり
清くさとくし給へるを　細　きさきの御ふるまひ
かくのことやうにあり給ひて　宗　院の山にまうて給ふ也
世中をおもひ志川まり給ふへんこゝろおもひの法のかりさ侍かまく
ゆかしくんまとものきされて何ゆへりしきことくをおほしなる
大后の法ともつくひまいらせつきて行はれたるさ侍ほは法のほ世
ことにて　勝月夜の事をおもひ給ふ源の法也
わくしる人さ法ありひなしね八時みのも時くまつき
ふ世ときりし給ふ　宗　源と朧月夜とのうちの事也
むかしまてもおもはれくらちくしそのひまの　宗　朧月夜と一

咲ちゝる人さきんとのうゑ也　若よりもともをかすの給ふさまを
給ふとも也
清少をおもひとけん給ふみも給ふ御ひらく　新　文あともみてこ給ふ也
むかし此中納言乃君のもとへもおほろけなるさまをもはれり
の給ふ　細　若の源乃んたうせし人也　宗　朧への妹也
うれ人のせうやたえるうつこれさきの事をめしうきてわらく
しくいみしうもれくりてそらしひ給ふ　宗　中納言の君ある事
の人なり
人德おもしてありしに世のこゝろしもへさくすまんたりさるをぬへ
世中のしちむかうしてかくしく無ひく事しんとさをやうこれあり
ささも　宗　せうし若君のもさる御れ簡ともせし八源のもの
またしとにふやうにかせとのうゑ也
西おもの月乃かほとにおほけるものおもひしき無おもへてことゝもあれ共

弄 源氏上天皇になすらへ給ふとの給へり
そこはもと又人なきまてしるしたまへりと云々たとへしるしなきを
くらゐもなきとの給 弄 朧月夜にも人なきまてしるしたまへりしるしなき
ハかりこにけんなきにやと也又かくこなきにもとハ和泉の前のなかりを
うちすてとの給ふなとこの院ありけり
猶此君にそや世中にとよひしるにつきてはしらもしるにとつう
こき給へるところ給はさはあへることしはのをそこに 弄 朧月夜の御也
和泉おほかたや源の御事をもたるとみえたるもうしよ
ことはしくこき給ひてとて源のするとの給へり
給ふまてにかしこき御こととゝもにてかよはる[illegible]
きこえさせたまひとありつるものから御そ[illegible] 細 [illegible]
なりや 弄 源の御心つもりしかとも[illegible]
なにこそや

んのとさんにていとをつゝしうる人にそれとうちなけきたまひて
なとゝとゝしに給るまのしきさうしとのこと字也 細 なれなきこと
なきにひとく宮ぬへしんのとうくいうくたまへんこのこと男子なる
ことなり 浄絡内菊不痕と云へり
いかしたまふをなるるしせなきたんかうしてなるといたしも
給ふさるさしと 細 弘徽殿の大后也世よりも宮をあるなり
弄 源の心やなるをなるさしせとも悪后のまゝしくしけるに
悪ひうさむハかりしうるなり
おもたるむさきたまへいぬる御ことあらしかやうなるハ何事
とあしくけりしるまたもあしくねて 弄 院の御ことなり
いまうしともなさやたまはまらかて 弄 ことなれなるうをこと
なる事也
ききうあし我身とかしたとうつるへしるへきなきやと 弄 [illegible]

何とてこれ源氏の心もちや
河 むかしは此たちあしきわろきとはしらずとをしとしるとあるかわろきや
思ひ侍らしかな 余 源氏の思ひ侍しかき給へる也
此ちはそれ柱をさらちの玉かつくしてあらまほしきてわ 細 和泉守なと
まかりなん 余 和泉守をあんないにてやとれるにかの給ひ
森ハ和泉守に河事をもかくれとくまかりなりしと書
猶やまして思ひかなしからうるにや
花宇治 さうさなるものこれ柱のくさと宝木をもの枝よりきてあると文
女房あまた 余 紫上あまた東院にあつまり給東橋のうへより
ひ給へもさまとともひ給ふと侍給ふ源の御也東北院と
八二条院よりと東院也
東の御かたりのもと御ひとつも比先の日比まてにひあちさく
あつりにたるとやさてし比まてにそうわかりしとおもひ

くてちかんとるちかきさやうにはまつかひもひかなさととらのま
下ハ思ひあちかん御心かへあさとくるともおもひ給
て 弁 二条院の東北院也
いとつらく御事さへし給ひとまてハいとしとみへ給ふをあらにと
あやしかりなん給ひなく 余 紫上の心やおもちたまへるへ人あまたと
たり給みそうやうにある事さへし給わハあるさとと紫上の
猶変し給ぬへし
たのもしき給へとも何事と 余 紫上へ源氏のさいく浮世
うそとまつれたる事へと紫上もいかかや也
此女の御かたの此段ハうちみるもいかとそれぬるとこのやうあれハさう
まてすこしたまふん心ひく 余 女三宮六条院へまいりたる
乃後も紫上のやうあるもちかく紫上はさてハ源へ隔心(キャクシン)し
給ふとも也

見しぬやうなくおもへは　栄　紫の上へとハかくこそ給へとも
思ふこそ志しぬ事ありてまてなし給へとも
その日ハ志ん殿へもさるまし給ひて后の宮さうらひ給ふたき
ものとに思ひまてかくし給ふひとくして思ひましきさん
のうきを思ひ入へうらり　栄　女三宮の御方へも其日ハ渡おはすく
人々をいふらし焼物をしひととかく其さし給ふとや
おもふ車に思ひしおほしたて出まつ参りて以て給ふいふこれ
かくして渡せらるとや思しなしくわするをおほしまいしたるま
しさくめ紀守ゆきしそおとろき行て　尋ねまいの御前共川
まいる車なとも有しるや　栄　若公あしろ車にて出思
なりきし給ふ時めしたるにとめもとのんや
はやしくいふに守のしうるるをもむつかり給へと　細　朧月夜の内侍
栄　和泉守なるか此使まいらせたるををはしめにとやまされ

先はそのやおほろさ大方わうつちくちち給ふとや
栄　わかしやうにかくうをしまへとさいうとをんなう御ふんとて
おまへろくへとにたすふとをてくへしやたきとのんや
何事うちに云ひめくらしていまとおもふ　栄　くるまにつかんし給へ
ともふくもしてはかなふいまなきをもや
細　渡せるさひるをと思ひし給ひくたてなてもとり給ひしなくても
前山ふまいるそれはとまりつらひや　栄　源氏に何山行て後の
前山ふまかれととるをとうつひ給ひや
前にむかしの心まつりさんこるとハのとくをなるさに思ふをと
とうらなく守のし給へも　栄　ものしなくもをさうれハのま
しこさと源の給ひや
いさなけくいふるとて給へり　栄　紫の上のさ由や
されなるに御ものさうひさうかくさうくに思ひ給ひをなく

ぬ　細　源のないしや朧月夜はさくらかゝらくしきさる也　宗　春宮の君
のゐとあはしよるよるしのひ給へとうるくしきさんをと云ひ
行ともいまさらかくれんおもしろ四也かはり静かにおほ
まししるゝなりとや
源氏はうちさきされはうれもくみくしさて　宗　これもそゝろ
いさゝかもとへかわくしく内わたり人々ちとりかはるしと
ふんやはしりいつかたにもろくさしなふりかくへかりけり
きんうしはやめありけるなと　宗　二条は太政大臣女也
さうゐのゐとはひくしにちへまゐりて見んなとしはありしはかりさ
めされは　花　陽殿のほそくあきて人のさとゝぬとにして
君ちかしとおもふらんみなるへし
いとわりやうちあり　細　源の内侍　宗　春宮の君はさまの御つくりく
乃ちに朧月夜と源のこゝろすくわりくしく夢さうれん

ちしらぬとおもへり
年月のほとをとをさまよりまさりて心ありしかは
かくおほゆるしかきさまゝうしけれこそかのはとゝかう給
宗　年来はきゝさしとおもへはまさりたるは内侍督のおか
めさ行とそつくりさとの源のないし
ありしくるをゆく藻にかきぬとしろさくちるとあるに
ゆへとてよるくとんめさくちるは宮はちのかた給も
細　鳰（ニホトリ）の鳥を鴛（ヲシ）鴦とおもへるおもしろ
河海　冬の池の氷をにかきあかるは冬のいとまは我もさる所
さもうつり行せう所とおほしはくるに　宗　右大臣はおそく
ましし時るとをおほせ給源のないしや
平中かまねひにはあらてよにたえさるまるらん　河　平仲（ヘイチウ）
仲文（ナカフミ）女（フニヤ）りしとにくさしけるもしと見らんとて　硯の瓶（ヘイ）り

まことハくもち月をぬらしてたくまりしとしきり女これと
力なつきてうらみてそのあはれなる雲を入ぬるとも志らしけれ
て又月をぬらしもとにおもてもとにありける時彼女我ありこそ
はしきを見るみまされともあはれなり給かれたるしきさう
人ありもとに行くやうハちとへありうらんとのなりけりくその
女鏡をおとしにけるをみんとて慎りけるに雨ふる雲此給へる
をおもひくるハ見て、未積むの須まり 昇 四云仲の字は
こりてうむりつ一稀合題ちこ 細 それまうされハ何しもとと云り
平仲 宗 平仲ハ見たなれ我を忘れ源もろ与つとれ源
かなや
むかしハかりまくおとるかしくハ思ひし終物つる 宗 源のなき也
思ふるとはもとを語物をしとのなりや
見とあくてやと思さうりくし語 花 陽炎を引 何きんかなく

ならんや
年月を中になさてくばかりきえ侍らもせれなくおもひつるなるか
細 此陽炎をあはれさかにけるをと洞りとハなしける事なり也
宗 源乃心ハ内侍と源との清中をひきしくなさて行ひく
なきうしくおもひ行むゆかにせんとあるなる洞とよめり
何かさりのせれなたるへしなさてつるやまをあはれにたてる
陽炎のなりや

女
源のことなれとあるとれ清水ゆきてゆきおもちハたえゆくたえあと
細 おもちハ江口まて遊ぶ 宗 内侍をんとあはれハ昔なと
此く清水乃ことくあふとくらせさきとあるきとよめ
思見をもあはれせきたるにまかり行あはれちと見きを
江路をまるせく云う清水ハ関の清水のなりや

河 もろひとの消えとハ忘るゝとおもひきこえさせしことゝもをめでたく源氏なりけり
るとくもさしあれはなし給へとひとしくことをおもひしつるとさそれは
うるさおほしかはるいましきとゝもをかりしよみさをたれらや
たひたてる給ふまをにつまて一たひのちきりめんハあるをもとへらるを
つまとおほしたりるを 案 内侍のんなり
これゆへあそそはすくいましきことゝも心つきとハ源
氏のことをあまへりきれハと一たひのたのみんをあら
せうと法んふうちあるへし
もとらるをはしめられる法とおもふをもたかりしひとのところ
ハさあくすり世中とおもひつるを はしめり 案 おもとしくしら
ぬ法をおもとやうにあそれとや 給 はゝし可₂詳₁
こそうるをともゆくおほ御中をわるかうれことにゆめれつるを
ともなくおほしあつめて 案 源とかの思ふのことをいへり

いとゞくもりなく給はまかれともむかしおぼしたるはたがひめれ
そのよのことゝもさとりぬ心ちしてことゝころはすくなきまて
なし給ふに いとゞくるしく給ふ 案 内侍の詞年た
あるうちとや
あそびかるくしをわたらるかるそて 案 源の君の詞
えんなり
ひとかるあしね世のためしましきとも思ひられてな
あれちかくその給ふらしきなると 案 院の詞なま
て心てさそのいそんをはしましきとれんや
いまさらしめならんかうちをめつらしく思ひなくかゆくとい
とうちわらひてかくて給へる御心をすてあそひたる
らぬころにすくちとわされてきさをいとうつくしなると
案 花よりも源の心也

花をこそれちりもはらくにおもひはめる本意を云の縁みえたる
るここち　細　ちりもせぬ心也
もし宿のえんし給ひしはしのことや事ならひしもおぼしい
づることつきのはかなきにくるかとも　宗　此句した二条の大臣
は花宴ありし時朧月夜と源の君とちぎりし事思ひ
しるやこゝろえんや
うれしきのことくきつゝまさる表わり右大臣中納言をさ
つまとくるとてはきかなしけるにきちくり給へく
宗　うきつらねるといふ心也や
此句は心をふかくめぐらんいかなるをえぬ心ちそふ哉
ひかくそ心にておもひを結へたちもあるべきとしありなくい
てくみにおほしけるもひたり　細　朧月夜の心也　宗　面は花の
ことも下の心を内侍の事や着るをも行一段のかうおぼえ

と云句也
山さへつきとめし出る日のそれやかなるにさしはじめもとつる
心ちもる清き夜のおもむきまうり結へる清きをそへたる
とさめつくし月を人の見もはる事はまして其の心ある
もおほゆまし　宗　山さへそれまた日の影をたとへるにある
もくもの夜のはる所やうたなる清きせいふ心也
かはらぬくもるどうなるものとくし給はさらん　細　中納言
君の心也朧月夜は源の君にてましまして見くらくさ
る細やとも也　又　中納言の心源の心のもらふかもそて
はかしまじくは源氏は人にもまさらんをると云なりや
宗　内侍と源の君の清きちかきにまさしくにおもふかしまさしく心に給合
給りんとは中納言の君の心也
清き心は人をもうらむを思ふくさこゝろにも給ひしともあ

なるしを　花　朧月夜ハ女御なとにもあらねは只内侍督ハ也
ふたつの識めくもあなれや　景　内侍も后もあたらしきをも
程も中々源氏にあはれにおほえし程にかうかうしくもとのこゝろ也
こ宮の事なりしをはゝかりし程かくぬ世のさまなれとかくし
きこゆるかうへにかくて　細　大后の事　景　弘徽殿也后に成給ふ
うちきたなる心とうしろめたさ思ひし　御めのと此中納言の
ならんや
やみにしかれとおもひそめける　景　内侍と源氏の事にやとまりぬるを也
あさましく何にくのこるともなくはかなくてさわかしきさまに
けしきよりもきこゆるにさしあたりぬると　景　と一言もひとつもたかへすや
たゝさも此中納言の方の也
源氏と心よせあるかも程なくしてきこゆる人かとせめて思ひなる
く侍らましかれハ　景　源氏の上の天皇后也

やうやう浅しあらむとゆふにひかへてくしつえて藤の花も比法華
さしもなきたるへくも思ひくさきえはかりなの也
やうやうきしけりなと　細　折日とかり
人めしてこのさ花かりたる花一えくさ折るを給へり
景　藤の事也ハ
さかうしをとまみ惣とおもひはりて御もあはれにくさやとの藤浪
細　昔此事や文字まさに浅き更もちとも夜のんや　景　源氏内
侍ゆくにさとまいるさうへに給ふもとゆりさりとさまてとあるとて
ありとも月かちりけりかとあきんとや藤を倒よりきたり
河右　ありもまへに文もあなれはたちぬへしんかくうしぬ世にしも夜へて
あまく　いつかさをとかりきこともさうしぬ関あれハかめとかへとをさなとしさるを
さひきにかもあきかへしちなくきもることもともいさとかかへぬとも
やとらくく枯れしさうつしひとつなるを給へるとかくるしうらんなる

女君も今はかくとおもひまうくさ給へくなさうれ給へるに
宋 源の上も聞えさせ給ふを見るく中納言の君をそへんとや
花の君はなど思ふつくして 細 朧月夜の君の源をとり
うかしとや 宋 内侍の源をあつしきとや
かとなきんかちともなとよ為ちかくて心をやはらかに此次
源の方とあまむじとあるとおとりるやきんしつかとちらく
をと人猶あらく人あると此かるとも心いとかまくきまいたまゝしき
ま方れハ波ととも見てしとよめるや 弄 孟同
宋 内侍か源の方をあきんとの給ふもきえのんまし此かる
きみくハあれとやうきまをかちとものとの渕あくしてゆかれ
よあうあうとも夜乃あといさまをうま給りしとやうきし
やの君しとみくるへし
いとわやうかる法あるまひとも 宋 源の方をとつりを給ふなや

心ありくもゆるさぬもたおほしなからく 細 君をひよゆるさ
ぬるのとや
関なれくとあらぬをゆるしあや 宋 法の君とも山のまるのた
ゆるやや
いとよくかくしひとさきてみそ給ひ 宋 原六乃ありくひ
給ふとや
うれしともへきとまふれくむとくめてとも給へりし清くみろ
法しあらくまつあさくやさあし法あらくひあまとみてうさ衣
ともさくあらん 細 帝を指也
みくしく世ひへ給つる法給くされのさ歯をまちるきく
細 源の法さ歯也 宋 源六条院へ法くるとの乃さ歯也
女君さきるりあらんとんれ給へれとおほかくくまてあらしお
きたり 宋 法は六條宮の法かへりてる給ふとハ出あらくおほめ

かくれてなし給ふとや
中くらゐの人なとし給へんよりもかろらかに
宗 源の心也紫上の様ことの給ふはかな人給ふやうれ
ゑるしとなり
るとかく見まゐらせ給へんと推量られは 宗 惟ことの給
ことの源氏の方へ見まゐらせ給ふとや
若しうともたゆつれ契りものことあらん世をかけて宮すし給ふの
むの君乃源ことも 宗 紫上乃機嫌をとり給ふもはの契を
うちそへて給へる給ふ也
伊勢 見ゆるんと思ふ心のうちも侍りきに物そうらへき
まうまくるとまへきあるねともあめ人乃ことも思ひ給へ連ひ中のか
みなれぬとまのこしにとつりつつたいめんなんのこりは
なんちとるらてん人めとうあるまゝしてうしそ今ひ

ところひまもとなくひ宮すへ給ふ まことまことましへき
細 紫上のへいつもと給ふ也
うちかくひさく心まのあつくともあらうの源氏給ひさ侮られ
細 紫上也
若と今に給ふをあらく給ふと 河 伊勢物 伊行尺 さつや去り御様北
おとこまのなさくりう色しむつしきとこにあらはよしともう那
中宮たる方此たあるるしるを空てさ給ふに源氏をと給へるま
このいとらうさきにこゆつたに 細 とにくくま我方ハ奉る空に
あらく人しとや 宗 源さやう此法心ゆより紫上のあらそ
られあつり給ふとや
うらみやとうくぬ法うしさらそふるしられさて思ひつるにひ
きうつとあるとしてもとく人給へ色そて何ろ人くともあつくりし宮そ
ねとさくりまふてそあつとにある源へ思されとそてるつり源心

とかく給はとにあつかひきこえ　細　源の詞　宋　思ひきこえなから

してかくはおさなき人なるをとけむやうにし給ふへきを

しらぬ給ふと也

そのうへ給ひしにあらぬなり　宋　紫上の気色をとらせ給ひて

内侍のかみ人わらはれなるましきをよくまきらはし給ひたり

様よ此法住寺色をこそ人わらはれ給ひしかとさへいはれ

くしまいは　宋　女三乃宮のことも紫上よろしくきこえ給ふを

ことなりと給ひぬと也

姫宮ハ何事もおほしいれぬとはかなきことにもおほとかにて

よそにある　宋　女三ハ源氏の給ふをもきこえ給ひぬ

とはかなきことにもおほとかなると也

ことのしるしなと見え給はぬもしきことをもきこえ

あはれなるよしいはるるをきこえてあはれなるには

さひしさにて給へり　宋　源の心也さることもおはしてとは宮をさし

しはしは御さまの給ふたるよしなり

桐壺の御方まちつらはしくおほして給ひて法住寺の方へあはれなる

まれに御まかてもなくおほひ給へるかうちに法住寺をはなれぬ

ことの心おほしたりまかてさせ給ふとさることなれと

ゆるし給はぬをいとよろこはしくおほしたり　桐壺の方

ことに　異　明石中宮の十三才　細　明石姫君也

宋　え給へ退出するかとの心也

めつらしきさまにかゝる事もそありける　細　御懐妊也

まうてとあるまし御心ほとにゆるしなく法あるまじく

おほしたるに　宋　明石姫宮ハひさしく退出のなかりつる心也

かうして給へり　宋　明石乃ひさしく退出のありつるに

姫宮此おりしも御ゆるしなくてかへすゝに法住寺にはまいりつる

ひかるさ 細 女三宮のまうしまうけのみし此たるの木也
花 西乃対の東面也
行く此法の今ハ清ふたるひとくちていつ給をかくまのかし
さ法をくせさりうし 細 宮安此つき給也
きいろうへうなさにさうるもくさくいめく給つきてまり 宗 紫上
の姫宮の法のま和ゑれたいむおかくんとや
姫宮安も中此戸あまて曲のんうひさくらうもさやうに付つ
うと法ひてちう此安もまりもしきくようる御物りよこうくしあれ
あそん中もくちうん行る人へさとおもくまり曲のう給へて
并 紫上語 細 女三のミやよ紫上此ひつてまきいめむ五之く
とや 宗 紫上源りうう給也
うち忘ほて 細 源也
おもうやうあう法のくむみてそハあきれけとおさたまきに過

給めるとこうゆきろうしるあう給へうしと 宗 源乃上
うきつまりしなう法のうひと源の思おけしめしとやや
おさかをにあしり給とハ女三のミや
ゆるしはなう給 宗 紫上うり法おはまと源ゆるし給也
宮にうきとも行い此思のきうりしをあまくますしうんとお
おもとハ法ひをまもまし引さけろひそくあいあらをひあ
らしとかへ給へりおとくハ宮乃法のにたろうちむ給く
細 紫上此んや御んのよもとさろうしてし忘ひ給也
柱ふさうのうへに給への 細 源女三宮へ中給詞也
のこともり名此姫宮りのくいめんのつくてよ女三のあへと
まゝり給んとひめ安きりの給也
きけいさにさいめんとてみてたけれ此つひてにちるさ
曲のしさをまかしをにをのとめるをゆるしあくりうひ給へ

しけいさ　細　きこゆる所也　孫　内女房の中の源の女三の宮の
詞也
かたときも見はなれ奉らぬ人なりしかはさかりすきてはつかしき
それをもつきなくもてなさんと思給る所　宗　紫上のゝ女三宮上
源の詞也
ちうしやうは中なかにかしこき女房たちなともおもふらんとおもふにの
詞　細　女三宮の女房の心也
人のいふへきにはあらねとこよなくおもふ心そあるらんとてめ　細　源の詞
人の心をおもひやるへくもおはしまさすとも也　宗　人の心
さかしきたちのまつりことにそのはしたなき人にかくれなきよし也
露ことにはなちてむつかしき事もなく思ひ給へらむやうになとつかひ給へし
御中らひにくらへてもうしろめたくおほすやうに
宗　紫上よりは御きやうたい（キヤウダイ）なるをこそ宮をはいとをしみ給ふ也

女にも心やすかりしものをとおもはんはさこそおもふらめとかく
おほしおほしなるれと　細　源の心也　女三宮のおほえはかはかしからねは
女はかゝりし人のさまにはあらぬとつきなきとも也
宗　紫上より女三宮の御かたちはまさりたまふをとおもひ侍るとも也
いとゝおもひしらるゝ人とのなかの批判なるへし
さまさまにおもひ給ふにもかなしとおもふに付てもなかなか
あはれともよそにてたちまちもなとしかもかつのゝひし　細　紫上の
御おもひやりてのかたとかさいのおもひとへつかはしと有る事也
紫上のきた人やはあるへき　花　紫上年比のおもひのうへ
その御心也　弄　紫上も宮の事をのたまはれともうしろ
めたくおもひしりけりしとなり也　細　紫上は我下の
ものをめせや　わか身をとしをいひてんとおもふなりし也
宗　紫上は源へ一番にしたりて宮の御ゆるしとのゝ也

あかぬ[illegible]しきけしきと　細　あさましく此婚娶乃儀なか
ら[illegible]惜とや　箕　かやうにうるさき事は此儀式なくは
出すれたらんと云ひかとや
見えしとときなきうけるなるをこしてはしめなきと云つ乱し達
てうちあふあ給ふ　箕　源氏の見えなきるなるを心えかたくする
きとの紫上乃心也
てあらぬひなきとたるいへ　箕　此比まさりてるあに御子たち
と拙云申したなるらしきうりともとに御給ゆゑや某ゆゑ人々
其女乃しととなく給はするを此比ともやそれあらしさて八
りたひの給る也人也御かや云ひなしなる也
となつらしなるともとものわかれしきとも此乃御ひなかとと
さしてわりはなるに云ふりあり皆るとともうつしそ御用
きつるき　細　悲者其吟悲乃心也

隠しなまし給へく　箕　只今紫上をうらみ給と也
宮女御乃君なとも此御ほんけともとにかくしうるも御もと
ふるへるをとき御覧しに見かて給ふるを見てゆかしきをかしき給め
あらそひるをも此君たちの物ともにいひてとりあつかふさまへき
細　宮女御乃方々にもよくしきときとあらつかふも
紫の上様をいひたてく見えし事はみんなおもへるも此よりなる
なるらんとや
様に侍ひしくしては見たまへる此とよみかりわる
紫の上をは見る事ともうつしもにとのひなかにそめく
たれやらに今めかしくみかひなきめさき給ふ御さしくなり
あはれにこるとはつめ給へてかひさらにれ見え給ふまへるを
とらくゑきまつるるとさの方りまかれぬめしくつきめ
なき女けまれし給へるを　私　紫上乃なると源氏の心也女三

文徳天皇の時ありきといふにや
ゆるかしとも有らんとおほしき　栄　薫大将の心をとく
なるとの源氏にや
うちきをとりつる時にてむかしひとをとよみしうたにさしい
まひらせしとみつよはきかたりをきるて有るとおほし
ときさせられらとかくしてをかしくもしつらんたりさ
給へり　栄　薫大将にてなくひのやうにかきて硯のしたにさし
入てをきし給ふを源氏のうらにしるしおくとや
あはちのゆかしきことみれんたりしたる比叡山ひらかれけるを
我身の人のあさましくおもひぬるにや薫大将の山めへまうでし
はあれなるか夢浮橋巻をみるより夏の山をまかるもおなしとそ
の朝あらんし又ゆめにまたもあるまじきや
栄
薫大将の心を源の薫にかきたるん乃付給ふとあるなる
その山より源をさとへくるるらんのうへのなるをかくとての
山かうろうそとそとよりのきとも女三の宮の御事ゆゑに
薫大将のうへらんなるへし　河　あるとその山をきなけとに
その方を若狭国の女のなよりへ清輔抄にも陸奥の河
なりけるは文尾張国と僧都もそれを思ひてよらなる
あるとその山をかくやに夢浮橋巻にもかんしたり六帖歌
ともその心也
六帖　白露はうつろうものをさ
白露ハうつろひしらん比ゆへの夢のうきはし
もあるとてくわりあそくめ給へ
あるをかかをとめをしらぬとも下野の露をしるとある
比比より池のとにゆる格へにゆめの夢文かとて夢のうんなる
あるや薫大将のくさらまて横川の源の心ゆかしらぬと薫大将のうへと申す
とふあり　細　源のこころ山へなる源氏なれはしめおもへは薫抄よりなるとこ

とくに源氏を不変なるとや薫の下葉と紫上のいたり
死給はんや 箋 あるまじきは末の世とかくいふ人のことともちるを
うしぬやうは源氏のそうつろひぬとのころや露の下をき
しきことなれとは紫上と萩りおとろへしなり紫上の心
うしきことなるやうありきへくれやうあるなれとのよ
こゆるや
あとうきことへいりしもさひ給ふ 箋 あつきことふ給ふや
さとにあまきてんへるしきはかしきのちとあそとのつしも
思つくしゆるをおとあすへきら給ふるもありつくく哀りわ
わきる 細 紫上の御心はあはれさとや 花 女三まうり給しみち
紫上のさ御を源おかほや 箋 紫上女三のまるまし給り
つきてんへるしなれとそのやうあるもみかしはらひあち
てあんし給ふと哀なることや

と思いいへとみるも清いと痛ましめへくなれい 細 紫上いとうつくしき
侍なれとや 花 女三紫上対面の時なれは源いとまあし
こととや 箋 紫上女三の宮あると対面紀秋あそく可然ま
ことなれは源滝月夜のうへたよそら給との心也
つる思ひ所ぬいとまりあしくあまだ給まくり 細 朧月夜也
いとあはれしきこえとしくいそしく 細 心ありいるよう出給し去り給へ
とまや花散るの方へひやくへ乃きしまへきは也
おかしうちゐもあそかれてはつゆしあり 箋 源の心もうくれいとくれ
行るまりしきるすゐなれとも心よそんまつるを清むらぬとや
春宮の御かたは志ちゃの母君よりも此清くへとていまし
きものなをのと常ゆし給つり 花 明石の姫君春宮此女御なる
細 とゆやは海よし母女御ときこえされたりさひあまれるや
明石の姫君也花散る統可然春宮の女御なれはやしちの

母君ハあらし此也 孫 何しれ女御のみこゑ母なしねと
紫上と切り物語しめさる也
いとうれしきにとゝまるひまさらむも給つるを 宗 紫上此ところ也
御かたの姫君はあひ給て御ともにしはり給ひまつとの法
そのやうになつかしひおふんとあり
おほひ過てこそうれしと見たまへけはむに物語なといとあなつり
く心のこりし給て中比とあまりく宮めもたへめし給へり
細 紫上の御方より云ひ越て給ハ侍る也 孫 紫上の心実
そのやうにおもひ給也
いとおさなきにの見えし給ヘハ心やすくて 細 女三宮此御さま也
おもかれくしくおやめきたる御さまに 宗 女三宮より紫上の事
いかなし給ひさくのさま也されたちぬる人へことさつとなるを
給ひおやのやうに姉くあつかひ給ふこそとさくちなるを

いかり
むかし此御もちゐとも云ふほ心にくし給ふ 細 紫上といへるをあなる
さかさる也 孫 女三母女御ハ紫上父乃兄弟なれハ也
中納言のめ此とおいはれかし出て 細 女三宮の御めのと也
おもかしうきこえ給ふこと御ゆかりハいとしきをあはれと
河 我やとくたのむよし此君しかしハあるのみさしとかやいそ
細 女三宮母女御源氏宮先帝皇子ハ紫上此姨なれハ也 松風巻ニ有
御ちきんかいのよし也 宗 女三宮の御ゆかりとまさんハ御かた
たゝの事也 孫 紫上の御ためとも知らるゝ也
さかさ世なり心をしき給ハつらてあまく母御かの紙いさのりハ
うとゝ給 宗 女三宮をも後人のやうにあそばしをともと
ほいなきかなれハとこそ入せとも也
あまりさるにも物し給ひて 宗 中納言の紫上此御さ

「[illegible]」

これからふるへとの詞也